

広がる建築家の職能・職域 ②
領域・分野を超えて

支部長就任退任挨拶

FORUM

近畿支部

ソーシャルデザイングループ OSA

海外レポート

覗いてみました他人の流儀

建築ウォームアップ

良質な建築、これからのまちづくり

温故知新

日本型規制社会と知的生産

未来へ継承したい風景

活動報告

わたしの愛用ツール





多様な工法を用いた鋼製下地で 安全で快適な床を提供

株式会社 染野製作所は、1943 (昭和18) 年に創業。1968 (昭和43) 年に茨城県牛久市で設立し、建築用鋼製下地材を販売・製造するメーカーとして、牛久市の本社・工場と東京支店を中心に全国展開しています。主力製品である体育館の鋼製床下地材は、さまざまな工法を取り揃え、競技や用途の多様化に対応する高性能の床を提供。国内シェア25%で、全国の主要な体育館で数多く採用されています。

取り扱い製品について、また今後注力していきたいことなどを染野真一社長にうかがいました。

体育館の床下地材に 日本で初めてスチールを使用

当社は1968 (昭和43) 年に私の祖父が設立し、私で5代目になります。“染野”という床のメーカーだと思われる方が多いですが、もともと軽量鉄骨下地材の販売会社としてスタートしました。

体育館の下地は今では鋼製が主流ですが、1969 (昭和44) 年に東京大学教養学部の体育館に当社の鋼製床下地が採用され、これが日本で最初にスチールを使用した事例でした。その後改良を重ね、1971 (昭和46) 年に鋼製床下地「ジム・エース」を開発。業界で初のJIS規格を取得し、現在も当社の主力製品として全国の多くの体育館で採用されています。

「ジム・エース」は、フローリングなど仕上材の下に設置したスチール製の床下地で強度や耐久性を確保しています。最近では体育館やアリーナを競技以外のイベントや展示会などに使用することも多いため、そういう多目的用途には耐荷重性能に優れた「ジム・エース スーパー G形」を提供。都市部など建物の上階に体育館を設ける場合には、階下への遮音を重視した「ジム・エース スーパー L形」など、業界をリードする商品を取り揃え、施工実績は全国で約30,000カ所にのびります。



「ジムエース」の構造。
ジムエースは優れた強度と耐久性を兼ね備え、各自治体や設計事務所の方々に高評価をいただいております。



アリーナスポーツのトップ選手によるアンケート「一番プレーしやすいアリーナ」のトップ10に、東京体育館など当社仕様の床が5件選ばれました。(一般社団法人 アリーナスポーツ協議会のアンケート結果より)

緩衝性と反撥性を組み合わせた さまざまな弾力の床を用意

当社が体育館の床で大切にしていることは、利用者にとって安全で快適であるということです。運動のしやすさは、主に床の弾力性によって判断されますが、小・中学校の体育館は安全性を重視しやわらか目に、バスケットボールは硬めなど、競技や用途によって求められる弾力が異なります。当社は、緩衝性と反撥性を組み合わせた工法により、さまざまな弾力の床をラインナップすることで、利用者のニーズや競技ごとに最適な床を提供しています。その対応力と性能が評価され、トップアスリートが使用するナショナルトレーニングセンターや東京体育館などにも当社の製品が採用されています。

最近ではバスケットボールやバドミントンなど専用体育館の相談も多く、そ

ういった時には茨城県牛久市にある工場に来ていただき、弾力性の違う床をいくつか組んで、実際に競技をする方に体感してもらいながら仕様を選択します。また、近年需要が増えている経年劣化による改修にも対応しています。

鋼製下地材の技術を活かした 地震に強い天井工法を開発

創業当時からの商材である天井下地材や壁下地材も、これまでに培った鋼製下地材の技術を活かし、耐震性に優れたものを取り揃えています。今後職人が減っていくことも視野に入れ、自社で開発した部材を使用することで簡単に効率的に組み上げられる施工性の高さも追求しています。

これらも体育館床下地と同様に当社の主力製品となるよう、現在、より耐震性の高い天井工法を開発中です。



SOMENO 株式会社 染野製作所

<http://www.someno.co.jp>

建築用鋼製下地材 (壁・天井) や建築用組床構成材 (体育館、重層体育館用など)、プール用可動床などの設計・開発及び製造、販売。

本社・工場 〒300-1231 茨城県牛久市猪子町648

TEL: 029-872-3151 (代) FAX: 029-873-3330

東京支店 〒144-0051 東京都大田区西蒲田7-60-1 染野ビル

TEL: 03-3735-4891 (代) FAX: 03-3736-9797

CONTENTS

- 4 新支部長就任挨拶 with コロナ社会において順応性高い活動を アトリエ慶野正司 一級建築士事務所 慶野正司
5 支部長退任挨拶 4年間の活動を振り返って ウィスト建築設計 藤沼 傑

COLONNADE

- 6 特集：拡がる建築家の職能・職域 ② 領域・分野を超えて
- 6 ベーグルと土木 ワークヴィジョンズ 西村 浩
7 建築と不動産の間に埋もれている価値 創造系不動産 佐竹雄太
8 建築力を呼び覚ますことが私の使命 一生まれ持った創造力を育む場づくりのエキスパートとして—
マザー・アーキテクチュア 遠藤幹子
9 芸術祭に関わり続ける サイクル・アーキテクト 山岸 綾
10 ブルースタジオにおける職能 —3つのデザイン(建築設計・不動産・広告)と一貫性のディレクション—
ブルースタジオ 岩田啓治
11 組織設計事務所が取り組むPM/CM/FM業務 山下設計 岸川聡史

FORUM

- 12 近畿支部 近畿支部京都地域会 文京建築会との地域交流 小田裕美建築設計事務所 小田裕美
14 連載：ソーシャルデザイングループOSA —その軌跡と展望— 第2回
ケニアのエネルギー、住環境事情 OSAジャパン 坂田 泉
16 海外レポート テムズ河の流れに乗って左眼右眼 —時間が育てた都市・ロンドンの今—
安部貞司計画・設計事務所 安部貞司
18 覗いてみました他人の流儀 山口太郎氏に聞く ヴィンテージ家具を通じて北欧と長く関わっていきいたい
Bulletin編集WG
20 建築ウォームアップ —建築のはじまりかたを探る— ライフワークがプロポーザル勝利につながる
林魏建築設計事務所 赤羽吉人
21 良質な建築、これからのまちづくり
With コロナ社会における建築まちづくり —コロナ災害復興フェーズフリーデザイン— 連健夫建築研究室 連 健夫
22 温故知新 団地遺産 工学院大学/設計組織ADH 木下庸子
23 抱負を語る 地域に生きる建築家として 栗原弘建築設計事務所 栗原 弘
抱負を語る 暮らしの周縁を拡張する UND 一級建築士事務所 加藤大作
24 連載：日本型規制社会と知的生産 —イタリアン・セオリーから学ぶもの— 第2回
「イタリアン・セオリー」から読めること(後編)と、「現勢力 vs 潜勢力」を超えた社会概念へ
大倉富美雄デザイン事務所 大倉富美雄
26 未来へ継承したい風景／活動報告
三多摩地域会 “もの”の保存、“こと”の保存 —未来へ継承したい住民による街並み保全活動—
アトリエテンノ実践女子大学 高田典夫
28 活動報告 交流委員会Bグループ 2019年度活動報告 梓設計 那須 浩
エフワンエヌ 向 利也
29 交流委員会Dグループ 新たなコミュニケーションツールの活用 リリカラ 青山 央
30 わたしの愛用ツール MINI CROSSOVER COOPER S／愛機カメラ

BACKYARD

- 31 NPO法人建築家教育推進機構からのお知らせ JIA 建築系学生支援事業に協力しました！
31 編集後記
2 パートナーズアイ 株式会社染野製作所 多様な工法を用いた鋼製下地で安全で快適な床を提供

表紙写真：遠藤幹子「おはなしこうえん」会場風景(千葉市美術館、2020年) 撮影 栗原諭

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<https://www.jia-kanto.org/>



with コロナ社会において 順応性高い活動を



関東甲信越支部
支部長
慶野正司

関東甲信越支部会員の皆さま、はじめまして。本年度、支部長を拝命いたしました慶野正司です。JIAに入会し本年で27年目を迎えました。入会後しばらくは栃木地域会に軸足を置き活動してまいりましたが、7年前から本部・支部運営に参画し微力ながら務めてまいりました。それは、私にとって「JIAが目指すところ」や、また今「JIAが抱える課題」などについて理解を深める貴重な機会となりました。ご指導いただきました先輩諸兄に感謝いたします。

さて本年度は、5月支部総会を機に新体制で始動いたしました。新型コロナウイルス感染拡大により経済も市民生活も痛手を負い急速な変容を強いられる中でのスタートとなりました。今日のコロナ禍において過去経験したことのない新しい日常（with コロナ社会）を迎え、各位におかれましては日常業務においてもJIA活動においてもご苦勞され工夫をされながらの活動であることと拝察いたします。

このような行動変容が余儀なくされるなか、JIA活動も早急な対応が求められ、社会的要請に呼応した行動指針として「活動ガイドライン」（表1）や「オンライン会議ガイドライン」などを至急作成し、6月に支部内各会議体に配信共有いたしました。今日では充実しつつあるオンライン化に、よりいっそう期待が高まり、さまざまなプラットフォームで諸会議やイベントが開催されています。そのような活動形態が続いているなか、集合式開催が懐かしく、また意義を再認識する一方、オンライン化することでコミュニケーションの常態化やイベント参加者の拡大など新たな交流機会が拡充する状況も生まれています。これはすでにコロナ禍における一時避難的な扱いではなく、未来に向けた活動スタイルが急速に進みつつあるともいえます。まさに今日の状況をポジティブに捉え、今後のJIA活動のあり方を考える良い機会でもあると思います。

そして、本年1月の役員会でご承認いただきました本年度活動方針・計画に、新たに重点課題として次に挙げる事項を追加いたしました。

〈追加事項〉

「with コロナ社会におけるJIA活動のあり方の検討」

1. これからのJIA活動や建築家の「職能」を考える。
2. これからのJIA活動の「交流」を考える。
3. これからのJIAの「財政」を考える。

そもそも、今日のAIの台頭、IoTの進化、また社会ニーズによる建築生産構造の改革が進むなか、私たち建築家の職能を見つめ直し、社会に示すことが求められ、また同時にwith コロナ社会におけるJIA活動のあり方を順応性高く再考し活動していかなければならないと考えます。

一方、JIAは我が国唯一の設計専門職能団体として「公益を保護」「公益に寄与」を活動の目的に掲げており、このように変わりつつある時代の様相に寄り添いながらも、この目的に沿って活動していくことに変わりはありません。JIAは本部、支部、地域会と活動軸は三様ですが、全国単一会であることが特徴でありメリットです。その中で支部の役割は地域事情に即した立ち位置で支部内外相互の風通しを良く、多彩な連携を促す大切なセッションでもあると理解しています。支部内には23の地域会、16の委員会、11の部会がそれぞれ活発に活動しており、過去多くの実績を重ねてこられました。その積み重ねられた実績をさらに継続・充実させていくことは言うまでもなく、新たな課題、積み残してきた課題についても積極的に発信していくことでJIAの社会的プレゼンスを高め、ひいては会員増強にも繋げてまいりたいと思います。

1年間、会員の皆様のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

表1 COVID-19に対するJIA活動ガイドライン

項目	実施方法	対面型		非対面型		実施時期
		対面型	非対面型	対面型	非対面型	
0 総会	通常総会（対面型）	実施	実施	実施	実施	実施時期は、支部長が各支部の状況に応じて決定する。
05 支部会	通常支部会（対面型）	実施	実施	実施	実施	
1 支部総会	支部総会（対面型）	実施	実施	実施	実施	
2 支部会	支部会（対面型）	実施	実施	実施	実施	
3 支部会	支部会（対面型）	実施	実施	実施	実施	
4 支部会	支部会（対面型）	実施	実施	実施	実施	
5 支部会	支部会（対面型）	実施	実施	実施	実施	

4年間の活動を振り返って



関東甲信越支部
前支部長
藤沼 傑

私は2004年にJIAに入会し、2011年から支部副幹事長、幹事長、副支部長を務め、2016年から支部長としての4年、合計9年間、多くの会員の皆様からご指導をいただいたことにまずは感謝を申し上げます。

確かな数値からこの4年間を分析しますと、2015年決算よりも2019年決算は良くなりました。本部からの分配金は約2割減りましたが、準会員の会費総額は約1.8倍、各種行事の参加費収入は約1.3倍になり、活動の経費は約14%減少しましたので、次期繰越金が約2,600万円から3,000万円に増えました。我々の活動は価値が大きいので、各事業の参加費をとれば必ず黒字になるということで、2017年度は赤字予算としてまで皆様に活動の維持と収入増をお願いしました。そのため、各地域会への活動運営費はこの4年間減額することなく維持しました。高齢化により、正会員の総数は減少していますが、この4年間で約100人が支部に新規入会しています。この数値実績から、新支部長には収入減対策ではなく、今後も活動の発展に重点を置くべきと進言したいと思います。

ボランティアとしてのぎりぎりの時間の中で活動を維持している皆様に支援することを主眼として、支部運営を心掛けてきましたが、組織としての効率がどうも悪く、迅速な判断ができなかったのが反省点です。その遠因は関東甲信越支部が大きすぎ、情報連携や意見調整が難しくなっているということです。支部の役員、各代表、委員長を合わせると100人近くとなり、各活動がわかりにくい。昨年からはようやく、県域と都内の地域会を分けて議論する仕組みを作りましたが、合計24もの地域会はひとつの支部としては多すぎます。今後は支部を分割すべきとこの4年間の活動により実感しました。

そもそも、私がJIA活動を始めたのは、市民の良識としてのパブリックという概念を日本にもう少し広めたいと考えているからです。現行の建築士の資格は官の都合に近く、パブリックからは遠い存在であるとJIAの諸先輩に教わりました。現在はあらゆるものが、法制化、ガイドライン化されていますが、それでも何か課題が発生

すると新たな規制やガイドライン作成を始めます。このような社会意識では変化や有事に迅速に対応できないということが、今回の新型コロナウイルス感染症により見事に証明されました。

都市国家シンガポールでは、建築家協会が増大し続ける法規制を抑制するように昨年からは政府と交渉を始めたという話を聞いています。構造改革は既成の規制を撤廃することですが、シンガポール建築家協会の試みは、規制を作らずにどのように進歩していくかというチャレンジです。このようなことが機能するためには、建築家協会のように公益を宣誓した専門家集団が、社会の良識としてのパブリックな活動を有意義に展開していることが必要です。他方、公益とは何かをきちっと定義することはできず、人々の情報交流の中で議論されていくものです。JIAの皆様と毎日のように議論できたことがこの4年間の最大の成果でした。

アルカジア東京大会2018と同時開催したJIA建築家大会2018東京が最大のイベントとなりました。世界との交流を深めると、各地域文化の重要性を再認識します。建築家は世界的に活躍できると認識され、資格の相互認証が議論されています。しかし、すでに相互認証が整備され、人と物が自由に往来できるEU圏内の建築家業務調査によりますと、国外の設計業務は5%程度です。エンジニアは万国不変の自然法則を対象としていますのでグローバル化できますが、土地固有の文化を担う建築家のグローバル化は全く異なる手法が必要となります。個人としての建築家の資質と、所属する建築家協会の資質とが両方機能することが重要と感じながら活動してきましたが、登録建築家制度と正会員との問題など、協会としての資質向上についてあまり貢献できなかったことがこの4年間の反省点です。

最後になりましたが、全国大会で若手支援を主眼として実施した大井町駅前パブリックスペース設計コンペの当選案が、この夏ようやく完成したことをご報告します。

この4年間のご支援、ありがとうございました。

ベーグルと土木



ワークヴィジョンズ
西村 浩

僕は、ベーグル屋だ。JIAの誌面らしくないはじまりだけど、僕は最近ここに建築家としての本来の意義があると感じている。よく、もう僕が設計をやっていないと誤解をする人も多いけれど、もちろん、出自である設計行為も当然やっている。日本という国が、「超人口減少」という史上未知の領域に突入して久しいが、加えてこの「コロナ禍」と近年毎年のように頻発する「超災害」という未体験ゾーンが重なり合う事態に、建築家には、自ら職能の意義を日常的に問い直し、柔軟に軌道修正しながら、未来のまちのため、未来のおとなたちのために今やるべきことを実践する想像力と行動力が必要なのではないか。そう考えると、建築家は自由であるべきだ。僕はよく建築家らしくないとか言われることも多いけれど、らしいか、らしくないかを決めるのは、過去ではなく未来だ。だから、ベーグル屋でありながら、それでも自身をあえて建築家と呼び続ける「変な建築家」が、世の中にひとりぐらいいてもいいじゃないかと思っているんだけど、どうだろう？(笑)

2020年1月、僕は佐賀市呉服元町に木造平屋の建物を新築し、ベーグル専門店「MOMs'Bagel」をオープンさせた。建物を設計することは得意だ。ただ、建物は中身がなければ必要ないし、建設投資を回収できなければ事業主も現れないわけで、建築家が設計だけを専業とする職能ならば、都市再生という舞台ではなんとも無力だと常々感じていた。地域の暮らしを豊かにすることが建築家の仕事ならば、いま建築家に求められることは、地域資源を生かした事業考案とそれを実践する事業主としての能力である。ちなみに、この案件では僕は事業主としての役割に専念し、あえて設計はしていない。

ベーグル専門店の立ち上げを考え始めたのは、この街に関わり始めて約6年が経過し、このエリアに店舗やオフィスを構える動きがかなり見られるようになっていた頃だ。その1つにSUSIE POCKETという雑貨屋があり、主にママたちの手作り雑貨を委託販売しているお店である。当初は小さなお店だったにもかかわらず、数年で約30人ものママたちの雑貨を扱うようになって手狭になったため、移転先を探しているということを耳にして、早速移転話を持ちかけた。SUSIEさんの入居を想定して、

木造平屋の建物を想定して事業計画を立てるものの、ママさんたちの手作り雑貨のお店からの家賃のみでは相当年数の投資回収となり、非現実的な事業計画となるため、弊社の自主事業として地元佐賀のママたちを中心に数名を雇用してベーグル専門店を開業することにした。

SUSIEもMOMs'Bagelも、ママたちが主役のお店だ。建物の計画時から、子育てをしながら仕事をして、好きな雑貨やベーグル作りを楽しんで、こどもたちと時間を過ごすことができる環境をどうつくれるかをママたちと一緒に考えてきた。コンセプトは「こどもたちとママたちの“やりたい”ができるまち」だ。前面道路はもととアーケードがあった商店街で歩行者専用道なので、こどもたちが外で遊んでいても安心だ。沿道のコンテンツとそこに集まる人々の暮らしが重なり合うことで、道路空間は豊かな風景に一変するのだ。

実は、僕は建築以前に、大学・大学院と土木の出身で土木の景観やデザインにも専門家として関わってきた。呉服元町の事例でもわかるように、近年はハードの景観やデザイン云々も大事だが、それ以上に使われ方の「質」が重要である。使い方を変えるだけであつという間に風景は変わり、上手くやればエリアの価値やイメージも一気に向上する。

直径10cmのベーグルは、建築を超えて、数キロの単位を扱う土木にも繋がっている。そんな視野で行動すれば、建築家という仕事は、実に面白い。



エリア価値の再生は、道路や建物のハードの問題よりも、その利活用の質によって決まる。佐賀市の呉服元町の駐車場の一部を利活用した取り組みで、まちの風景は一変した。

西村 浩 (にしむらひろし)

JIA正会員

1967年佐賀市生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学系研究科修士課程修了後、1999年ワークヴィジョンズ設立。建築・リノベーション・土木デザインに加えて、全国の都市再生戦略の立案にも取り組む。受賞歴に日本建築学会賞(作品)、土木学会デザイン賞、グッドデザイン賞大賞など。

建築と不動産の間に埋もれている価値



創造系不動産
佐竹雄太

私は、不動産屋である。しかし、そんな私は大学、大学院と建築を学び、元は建築の設計を仕事にしていた。そこから、私は不動産会社に入ることになるのだが、その理由は自分に対する危機感だった。一級建築士免許を取得し、管理建築士になり、着々と自分の設計事務所を開く準備を進めていたつもりだったが、正直なところ独立してやっていける自信が全くなかったのである。そんなとき出会ったのが、現在私が勤めている創造系不動産であり、代表の高橋寿太郎が起業したばかりの小さな会社だった。この建築業界を生き抜くのに、何かほかの人と違うスキルを身に付けたいと、私は不動産の世界に飛び込んだ。

ゴールを共有すること

建築と不動産の業界は違う。それは建築業界の方なら誰しも分かっていることだと思う。仕事に対するマインド、扱う法律、取得する資格、教育などさまざまな点で異なる両業界である。その間には大きな壁があり、今まで建築と不動産の専門家がタッグを組んで1つのプロジェクトを進めるということが、上手くできない状況であった。けれども、私が働く創造系不動産という会社は、そのタッグを実現し、不動産の専門家として建築家がプロジェクトを進める上でのパートナーというポジションを確立した。働くメンバーは全員、建築業界出身であり、もともと設計を仕事にしていた。だからこそプロジェクトのゴールを建築家と共有することができる。これが何よりもプロジェクトの成功において大事だと考えている。これが船だとすれば、先に降りる船員は自分が下船した後の食料や燃料についてどこまで真剣に考えているだろうか。私は建築家と共に、プロジェクトという船に乗り、同じ終着点を目指す運命共同体でありたい。

違和感にアプローチする

不動産の業界で、建築のマインドを持って働いていると、大きな違和感を持つことがたくさんある。その中の1つは、不動産の価格査定の一面的な評価基準である。建築業界にいたときに目指していた「良い建築」が価値として評価される仕組みは、そこには存在しない。駅からの距離や、土地の広さや道路付け、建物の築年数や構造といった指標で価値が決まるのである。今、その常識を変えるため、建築家が設計した中古住宅だけを専門に扱う

不動産ポータルサイト「建築家住宅手帖」を立ち上げる取り組みをしている。これによって、建築的な価値が評価され、それが分かる人に繋がれていくような新しい不動産市場を創りたいと考えている。市場の価値基準を変えるのは簡単なことではないが、長い時間をかけてでも達成したい。こういった違和感の中に、建築を学んだからこそできる別業界からのアプローチがあると思っている。

建築で学んだことを活かす術

建築業界で働く専門家は優秀である。最近、さまざまな大企業のビジネスマンと会うことが多くなったが、よくこう思う。だからこそ、職能を拡大するということは、その気になれば建築業界の方は簡単にできてしまうだろう。しかし、それで解決となるだろうか。私はそうは思わない。逆に、建築周辺に領域を拡大するあまり建築家本来の職能が薄まってしまふかもしれないという危機感を持っている。それではどうするか。建築業界での経験を活かせる別領域にしっかり軸足を移し、そこから建築業界に何ができるか向き合うことだ。そういった建築分野を理解した別業界のスペシャリストが多数必要であり、建築家は、自分の専門性を研ぎ澄ませながら、彼らと積極的に協働する方向に向かうべきである。

近年、建築プロジェクトの高度化が進み、こと家づくりに関しても、老後まで住み続ける前提ではなく、売却、賃貸、二拠点居住などを見据え、資産性を考慮した検討が必要な場合も多い。その際、不動産だけではなく、ローンを含め金融や税金、社会や経済の動向など多岐にわたる知識が求められる。しかし建築家は、自分で全ての役回りを行うのではなく、チームビルディングの意識を強く持つべきだ。そして、そのチームメンバーが全員同じゴールを見据えることができていないか。建築家が磨くべきはこの技術ではないだろうか。私はそう考えている。

最後に、私は今では建築設計を再びやろうとは全く思っていない。自分の今の専門性を持って建築家と協働する方が、より遠くまで行くことができると感じている。

佐竹雄太 (さたけ ゆうた)

1985年神奈川県生まれ。2007年東京理科大学理工学部建築学科卒業。2009年同大学院理工学研究科建築学専攻修了。その後、アトリエ系設計事務所、注文住宅設計会社勤務等を経て2016年より創造系不動産。建築家との協働プロジェクトに従事。

建築力を呼び覚ますことが私の使命

—生まれ持った創造力を育む場づくりのエキスパートとして—

一般社団法人
マザー・アーキテクチャ
遠藤幹子



巣をつくることは動物の本能のはずなのに、なぜ専門家しかできないのだろうか？ そんな疑問を抱えながら、私は自分を「わくわく建築家」と名乗り、「すべての人が生まれ持った創造力を育める場をつくること」を生業としています。

その背景は、まず母親になって子を育てたことが大きく、さらに2008年に初めてアフリカに行った時に、村の人に「この家は誰が建てたの？」と聞くと、「え？俺がつくったよ」と言われ、「じゃあレンガは？」と聞くと「自分で焼いた」、「材料は？」と聞くと「そこの地面を掘った」と言われてしまったことです。まるで庭で野菜をつくるように家をつくる彼らの姿から、ここでは建築家なんていないのか！と強烈な衝撃を受けました。さらに2011年に東北を訪れた際、被災者の方が「仮設住宅がまだなくて」と嘆かれる姿を見て、なんでこんなに平らな地面と木があるのにみんな自力で建てないのだろうか？アフリカの人だったらさっさと街をつくっているだろうに！と、またまた衝撃を受けました。

もしも現代人が「自分の居場所は自分でつくれる」と自信を持てたなら、もっと人生や世界へのオーナーシップを取り戻せて、困難な状況だって主体的に創造的に乗り越えられるのではないか、それによって誰一人取り残されない世界、持続可能な社会が実現するのではないかと強く思い、それ以降、人々の「建築力」を呼びさます伝道のような仕事をするようになりました。

分野は教育、福祉、国際開発、アート、イノベーション方面と関わる事が多く、内容は大きく以下に分類されます。

- ①国際開発における建築技術移転の教育
- ②文教施設のプログラムと空間のデザイン
- ③作家としての参加型美術イベントの開催と運営

売上は②が最多で、メッセージ性や社会的インパクトは①、実験性と顧客リーチ度は③が高いです。組織はほぼ私の1人法人で、プロジェクトごとにチームを組んで協働し、作業場所にこだわらず好きな場所に住んで働いて10年になります。

代表作は、①はアフリカの農村で妊産婦死亡を減らすための施設建設を専門家の介在なしで行えるよう、地域住民が自らデザイン施工できる「型」を編み出し、技術

移転とオーナーシップの育成に成功した「ザンビアのマタニティハウス」。②は市民や専門家が協働してイノベーションを起こすことを目的とした「福岡市科学館」。③は来場者が自らつくったもので会場を溢れさせ、互いに創造力を褒め、遊び、刺激し合うあいちトリエンナーレ2019の「アート・プレイグラウンド」や千葉市美術館の「おはなしこうえん」など。特に現在開催中のおはなしこうえんは、コロナ禍でも物理的距離にかかわらず皆で集まってつくり、学びあえる場として、YouTube配信をしたり、毎週オンラインワークショップを開いたり、VR空間に作品を投稿展示できる仕組みをつくったりと、新しいことに挑戦しています。

一見分散していても、全ての経験が補完しあって私の創造力を育む場づくりスキルが上がっており、わくわく建築家というオンリーワンの職能のお陰で競合もなく、食いぶちにも困りません。また一級建築士という肩書きが与える信頼は絶大なのと、過去の建築設計監理経験から「どんな仕事も基礎から完成まで確実にやらねば」という戒めを持てているのも大きな強みだと思います。

いずれも共通するのは、「建物を自分でつくれたことで、今後何があっても乗り越えられる自信がついた！」「そんな場所は持てないと諦めていたけれど、動けば生み出せると分かった！」などの感謝の声です。

私にとって建築は、全ての人が幸福に生きるための大切な手段であり、その力を広く普及すればするほど、世界は健やかに逞しく成長すると信じています。今は何屋さんなのか自分でも分かりませんが、死ぬ間際にでも「ああこんな領域を完成できたのか」と実感できればと思います。



「ザンビアのマタニティハウス」。ペインティングワークショップ(左)と設計伝授ワークショップ(右)。国際協力NGO ジョイセフと協働。

遠藤幹子 (えんどう みきこ)

1971年東京生まれ。東京藝術大学美術学部建築科卒業、同大学院修士課程修了。インテンショナルリーゾー一級建築士事務所勤務を経て、1998年 guest house を共同設立。その後オランダへ渡り The Berlage Institute を修了。2003年に帰国し office mikiko を設立。2013年に一般社団法人マザー・アーキテクチャを設立。

芸術祭に関わり続ける



サイクル・アーキテクト
山岸 綾

始まりはたまたまだった。独立間もない夏の朝、アートディレクター北川フラム氏から連絡をいただいた、曰く「次の芸術祭、ちょっと手伝って」。次の芸術祭、とは新潟県十日町市・津南町での「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ（以下妻有）」のことで、ともあれ現地に飛んでいき、アーティスト・絵本作家の田島征三さんと展示場候補の空き家を見て廻った。次に連絡がきたのは冬。空き家をちょっと、のほろが「廃校になったから」と言われ驚きつつ、雪にすっかり埋もれた校舎の実測からはじめた。

木造校舎をコンバージョンした「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」がオープンしたのは2009年の夏、観客は流木や和紙でつくられた「空間絵本」の物語の中を巡る。元職員室のカフェや本屋もある小さな美術館ではその後も多くの企画・展示が行われ、数百の作品がある妻有の中でも拠点施設となっている。

これを機に「瀬戸内国際芸術祭(大島)」「あいちトリエンナーレ」「奥能登国際芸術祭」他、アートの場に継続して携わらせてもらっているが、関わり方が2種類ある。ひとつは、妻有のように一建物を担当・改修する形。瀬戸内、奥能登もそうで、いわば作家と同じ立場で“参加”する。

一方あいちトリエンナーレ（以下あいつり）では、キュレーターやコーディネーター等と共に「アーキテクト」という専門職で、スタッフ側に関わる。分担はするものの、美術館とまちなか双方、しかも私が関わった2回目以降は愛知県内の複数都市で開催されたため、2013年は岡崎市、2016年は豊橋、2019年は豊田、と「都市単位」で担当した。

都市型のあいつりでは、公共施設に加え民間ビルの空室・空き店舗等を期間限定で借り会場とする。復旧条件や作家により手の入れ方は異なるが、ほんの15㎡ほどから3,000㎡まで、都市に点在する大小さまざまな十数の空間に同時多発的に関わる、これは他ではない面白さだ。

岡崎会場ではデパートの空いた上階をお借りした。デパートとして稼働している下階からどう会場に入るかに作家・向井山朋子+ジャン・カルマン氏がこだわり、検討調整し小さな裏階段を使わせてもらった。結果、日常からワープしいきなり異世界に入り込む。さらにバシー

ア・マクール氏、志賀理江子氏と暗い迷宮のような空間が続いた後、studio velocity（栗原健太郎+岩月美穂氏）の真っ白な屋上に誘われる。その大スケールのあと、街を歩き、松應寺に残る木造アーケード長屋で青木野枝氏の作品に出会う……。

作品空間そのものと同じく、そこに至るまでの経路が重要で観客の体験に強く刻まれることに、そこで気付いた。また同色のサインやTシャツを着たスタッフ、ガイドマップを広げた観客が歩くことで街に流れと風景が生まれる。点の繋ぎ方で、街そのものを展覧会動線・空間にできる。以降の2016豊橋、2019豊田では、建築の人間としてその部分に意識的に関わるようにした。

あくまで作品が主なので裏方に徹するが、完成した作品の空間の使い方に唸り、学ぶことも多い。また作品本体の制作には原則関わらないのだが、豊田では高嶺格氏のプールの作品をうっかり担当してしまった。建築側からは発想し得ない空間に出会うことも、芸術祭に関わる醍醐味である。

その後、妻有では「^{ぬながわ}奴奈川キャンパス」という拠点も手がけ、来年に向け新たなプロジェクトも動き出した。妻有では場所が継続し、集落に関わることが大きいのが、さらに複数の場に携われることで、また違う光景も見えらるだろう。

コロナ禍で、多くの人を地域に迎える芸術祭も苦しい時ではあるが、人が集う場所をつくる建築自体の命題と重なることでもある。引き続き関わりながらここでできることを考えていきたい。



あいちトリエンナーレ2019
高嶺格〈反歌：見上げた空を悲しもその色に 染まり果てにき 我ならぬまで〉
(2019)

山岸 綾（やまぎし あや）

1973年宮城県生まれ、愛知県育ち。1998年早稲田大学大学院修了。1998～2006年原広司+アトリエ・ファイ建築研究所勤務。2006年サイクル・アーキテクト設立。工学院大学、中部大学非常勤講師。「タガイ/チガイ」他住宅等の設計に加え、国際芸術祭や街に展開する現代美術の場に携わる。

ブルースタジオにおける職能

—3つのデザイン(建築設計・不動産・広告)と一貫性のディレクション—



ブルースタジオ
岩田啓治

昨今、「中古物件を購入し自分のライフスタイルに合わせてリノベーションすること」は、すでに一般的な選択肢の1つとなっている。1998年にグラフィックデザインを中心に行う広告の会社として大地山博おおちやまが創業したブルースタジオは、2000年からリノベーションに関する設計と不動産に関するサービスをいち早く開始した。

ブルースタジオが提供するサービスの特色としては、モノ・コト・ジカンに関する「3つのデザイン」を行うこと。すなわち、建築設計・不動産・広告の業務と、これらに関する一貫性のディレクションを行い、物件の価値を最大化させるサービスを行っている。



ブルースタジオの3つのデザイン

学生時代に私は、日本最古の木割書といわれる『三代巻』を題材に修士論文を書いた。ウィトルウィウスが「原理を知る工匠」とした「建築家」に対し、『三代巻』では「仏祖不伝の『妙』をなす者」として「番匠」(中世の建築工)の姿が示されていた。建築をつくるものとして、設計を通してどのような「妙」(妙技)を行うべきかというのが私の通底する問題意識となっていた。

一方で、公共建築を除く多くの場面で現代の建築のあり方を決定しているものは、現実的には経済合理性によるところが大きいと感じていた。「はたして設計者のコミットによって、建築の経済的な価値を上げることができるのだろうか」。そのような疑問を漠然と持ちはじめた頃にブルースタジオに出会った。

私がまだ前職の組織設計事務所にて在籍していた時、以前の同僚の大島芳彦(現ブルースタジオ専務取締役)にブルースタジオの手がける区分所有マンションの販売物件を見せてもらいワクワクした。500万円で購入した物件に300万円かけて1,000万円前後で再販する。「デザイン」がそのまま物件価格を上げる理由となっていた。た

だし、ここで言う「デザイン」はインテリア改修のデザインだけでなく、不動産売買や広告のデザインまで含めた「一貫性をもったデザイン」だった。

現在のブルースタジオでは、法人・個人にかかわらず長期の資産運用を目的とする民間のクライアントが多い。人口縮退期に入った現代において、持続性を求める長期目線で不動産の価値を保つもしくは上げていくには、新築であれ改修であれ、関わる人々の共感とともにエリアの価値を上げ「選ばれる場所」となることが重要となる。

たとえば賃貸住宅においては、エリアの価値を含めたその物件ならではの「暮らしの楽しさ」を商品とすることにより、収益性を高めるようなプロジェクトを多く手がけている。その際、ブルースタジオは共感を生むコンセプトを伝えてプロモーションを行うことにより、入居者が決まるところまでコミットするとともに、その後も不動産仲介や管理業務などを通して持続的に関わり続ける。

また、エリアの価値を上げることに取り組む中で、プロジェクトが次第に公共性を帯びるようになり、近年は公共的なプロジェクトに関わることも増えてきた。公共建築やまちづくりにおいても、事業が持続するためには経済合理性が不可欠という認識が高まるにつれて、官民連携事業やリノベーションまちづくりに関連した業務などに関わる機会が増加している。

今後、建築家・設計者の職能として、事業主の経済合理性を含めた意思決定をサポートしながら、その事業を社会的・公益的に価値のあるものとして仕立て、持続させていくことが必然的に求められていくと考えられる。そのため我々ブルースタジオでは、「建築設計」に加えて「不動産」「広告」という職能を同時に発揮することにより、顧客にソリューションを提供している。

一般論的な「建築設計」の職域にこだわらず、他の職能にも目を向け、各々の得意分野とこれらを組み合わせることにより独自の「妙技」を提供する「建築家」が増えると、世の中が面白くなるのではないかと思う。

岩田啓治 (いわたけいじ)

JIA正会員

1971年大阪府生まれ。1995年京都大学建築学科卒業。1997年京都大学大学院建築学科修士課程修了。1997～2003年石本建築事務所。2003年ブルースタジオ入社、現在に至る。執行役員、アカウントマネージャー、管理建築士、一級建築士。

組織設計事務所が取り組むPM/CM/FM業務



山下設計
岸川聡史

組織設計事務所に求められる新たな領域

プロジェクトの多様化・複雑化に伴い、クライアントが設計事務所に求めるニーズも多様化している。設計・監理業務だけでなく、その周辺業務をいかにクライアントの立場に立って行えるかがクライアントの満足度を高め、結果としてプロジェクトの価値向上に寄与する。

近年、コンストラクション・マネジメント（以降CM）が普及し、公共工事においても採用されるケースが増加しているが、その目的は発注者支援と第三者性の確保にある。これらは設計事務所で行うことが可能な業務であるが、設計者に対して第三者として接するという通常業務とは大きく異なる視点が求められる。設計・監理の経験とノウハウは必要であるが、設計者としての立ち振る舞いは求められない。日々設計業務を行う設計者がCM業務を行う際には、役割が違うことを念頭に意識の変革が必要となる。ただし、設計者からの提案に発注者が満足できない場合は、コンストラクション・マネジャー（以降CMr）の持つ設計経験に基づき、別の視点での提案をすることでより良い施設となる場合もあり、臨機応変な対応が求められる。CMrは設計の質を高めるといふ設計者の視点だけではなく、プロジェクトの価値を高めるといふ視点が求められることに注意されたい。

多様化するクライアントニーズに応える

プロジェクト・マネジメント事例

プロジェクト・マネジメント（以降PM）の観点から、当社が実施した設計事務所の役割を最大限に広げ取り組んだ事例を示したい。PMはCMよりさらに発注者に近い位置でプロジェクト全体をマネジメントする。元来、設計事務所が行ってきた業務でもあり、プロジェクトの価値を高める意味で設計事務所がこのサービスを提供することでプロジェクトが円滑に推進される。

開発の事例は「GREEN SPRINGS」。立川にある昭和記念公園の向かいに位置する4.5haの敷地にホール、ホテル、商業、オフィスを含む約76,000㎡の多用途複合施設を開発するプロジェクトである。本プロジェクトで当社が果たした役割は、図1に示すように企画や開発手法検討から始まり、プロジェクトのトータル・マネジメン

ト、設計・監理、施設運営管理準備支援まで多岐にわたる。これらの業務は別々の会社が受け持つ場合もあるが、本プロジェクトはこれらの業務を当社が一通り行うことで、発注者を全面的に支援している点の特徴である。本プロジェクトには多くのデザイナーやコンサルタント等が参画しており、関係者が多種多様である。PMはこれら関係者の役割の整理や調整、進行管理、事業予算管理の機能を果たし、一元管理を行った。重要なことは通常縦割りとなりがちなプロジェクト実施体制が、図2に示すようにPMとそれぞれの設計者がシームレスにつながることによって発注者を中心に1つの円を描くようにつながっている点にある。このようなプロジェクト実施体制を早期に構築することで情報の断絶が少なくなり、プロジェクトメンバー全体が一体となって開発に邁進するプロジェクト運営を実現した。

多くの関係者が参画するプロジェクトにおいては、コンセプトや方向性・目的を共有することが非常に重要であり、調整して埋めていく役割が求められる。チームビルディングに重きを置き、プロジェクト当初から関係者で多くの議論を行い作り上げていくという通常とは異なるプロジェクトの進行となった。設計事務所がハブとなりクライアントが行うマネジメントを支援するという取り組みの一例であり、組織設計事務所の1つのソリューションだと考える。



図1 業務範囲



図2 プロジェクト体制

岸川聡史（きしかわ さとし）

1974年神奈川県生まれ。1999年東京大学大学院修了後、山下設計に入社。現在、取締役執行役員 ソリューション本部長。PM/CM業務を中心に従事。実績：東京アクアティクスセンター、GREEN SPRINGS、立命館大学大阪いばらきキャンパス等。

近畿支部京都地域会

文京建築会との地域交流



近畿支部
京都地域会長
小田裕美

近畿支部京都地域会は、JIA関東甲信越支部文京地域会と東京建築士会文京支部が合同で活動している「文京建築会」と、2015年から地域交流を行っています。見学会等を企画し、1年ごとに京都へ来ていただいたり、東京へ行かせていただいたりして親交を深めてきました。その中から、私が地域会長として参加した、2018年から先日行ったオンラインでの地域交流までの3年を振り返り報告します。

東京から建築家仲間を招く

2018年は京都地域会が5月13日・14日に見学会を企画しました。

初日は東山の麓にある横内敏人建築設計事務所・若王子アトリエと若王子のゲストハウスを見学しました。自然の中に溶け込む丁寧につくられた建築の中で、横内氏の作品に対する想いから普通の事務所での様子まで、多岐にわたりお話しいただきました。何冊ものスケッチブックを自由に拝見したり、事務所のすべてをオープンにして見学させていただきました。夕方より場所をロームシアター（京都会館）のモダンテラスに移して懇親会を開きました。食事を共にすると関係がより育まれます。参加した会員事務所のスタッフには貴重な経験になったと思います。

2日目午前は、京都を代表する数寄屋大工・中村外二工務店の本社工房と初代中村外二氏の自邸を見学しまし

た。素材選びから工法、仕上げに至る、妥協のないものづくりの哲学を語っていただきました。午後からは数年一度の特別公開日以外は非公開の大徳寺孤篷庵を見学しました。建築と庭園について、ご住職と中村外二工務店代表の数寄屋大工棟梁・中村義明氏から丁寧に解説していただき、歴史的名作を改めて学び直す機会となりました。参加者は京都地域会、文京建築会の合計で58名でした。

東京から目の肥えた建築家仲間をお招きするというこゝとで、京都地域会員のネットワークをフルに活用し、地元の建築家でも「これは行かねば」となる見学会にすることを目指しました。

文京建築会企画の見学会に参加

2019年は文京建築会の企画で京都地域会から25名が11月15日・16日に東京へうかがいました。

初日は井の頭の家（設計：手嶋 保）の見学から始まりました。2018年の第30回京都地域会通常総会の基調講演をしていただいた手嶋氏には京都地域会の中にもファンが多く、ご本人に解説していただきながら高低差がある5つのフロアを行き来するのは幸せな時間でした。引き続きその手嶋氏の師・吉村順三氏が設計された、戦後モダニズム住宅の秀作である荻窪の家を見学しました。改装・修復されながら大切に残されている国登録有形文化財を、当時の図面等も見せていただきながら堪能しま



横内敏人建築設計事務所・若王子アトリエ



京都での懇親会（2018年）



荻窪の家



清家邸

した。

夕方からは、文京建築会の元代表である野生司義光氏の自邸でウエルカムパーティーを開催していただきました。都心の夜景を楽しみながら、上質な空間で美味しいお料理とお酒をいただき、あまりの居心地の良さに遅くまで長居してしまったことを反省しています。大変お世話になりました。ありがとうございました。

2日目午前の清家邸(設計:清家 清)では、清家氏のご息女八木ゆりさんと建築家の八木幸二氏に案内いただき、家の歴史や当時のお話をとても楽しく聞かせていただきました。京都出発前から、ずっと現地を訪れたいと思っていたという会員が何人もいました。午後は吉村順三設計事務所出身の林 寛治氏の自邸を見学させていただきました。同じくOBの増田 奏氏もご参加くださり、お2人から丁寧なご説明をいただきました。設計コンセプトについて、構造についてと、この居心地のいい家への質問や感想が途切れず、また長居してしまいました。

こうして、非常に質の高い、貴重な見学会を2日間体験させていただきました。建築が大好きな西の仲間をどう喜ばせようか、どう驚かせようかという思いが伝わってくる素晴らしい見学会でした。文京建築会の皆様の企画と準備のお骨折りに深く感謝いたします。

オンライン建築家交流戦に挑戦

そして2020年今年は京都が企画する年ですが、このコロナ禍の中、京都へお招きしたり、大勢で見学したりというのは無理だと判断しました。延期、中止は寂しいし、何かできることはないかという中で出てきた案がWebでの地域交流です。

題して「JIA京都地域会・文京建築会 オンライン建築家交流戦」。

「東(文京建築会)と西(京都地域会)に分かれて、建築とプレゼン能力を競い合います。5対5の団体戦で、各5分で、それぞれの建築や建築論について熱い思いを語っていただきます。東の応援団長は、手嶋 保氏、西の応援団長は魚谷繁礼氏にお願いし、交流戦の勝敗は、オーディエンスのみなさんの投票によって決定。オーディエ



野生司邸での懇親会(2019年)

ンスも講評者として発言したり、チャットで参加していただくことにより、Webならではの双方向の参加型イベントを目指します。Zoomに慣れた方、未経験というかたもぜひ、お酒を片手に気軽にご参加ください。という企画です。

参戦メンバーは以下でした。

文京建築会(東)	京都地域会(西)
会田 友朗 アイダアトリエ	木村 吉成 木村松本建築設計事務所
加藤 大作 UND一級建築士事務所	関谷 昌人 関谷昌人建築設計アトリエ
川口 琢磨 川口琢磨建築設計事務所	服部 大祐 Schenk Hattori
河野 有悟 河野有悟建築計画室	柳室 純 柳室純構造設計
長坂 健太郎 長坂設計工舎	山本 麻子 アルファヴィール一級建築士事務所

7月24日(金)18:00~20:30終了予定で行い、約70名が参加しました。結果は、団体戦は西が勝ち、MVPは東の川口琢磨さんでした。

新たなチャレンジであり、まだ総括も終わっていませんが、私は見ていて聞いていてとても楽しかったので成功したと思っています。段取り的な反省点はいろいろありますが、プレゼンの内容はとてもレベルの高い戦いでした。

このようにリモートでの地域交流が可能になると、今後事業企画する時の方法が1つ増え、JIAの地域会同士の交流が距離に関係なくより活発に行われるのではないかと期待します。以上が直近3年間の地域交流の報告です。

これからも、京都地域会と文京建築会は地域交流を活発に行い、日々の業務に追われる中、たとえひと時でも「まだまだ勉強しなあかん」って本気で思える機会をつくり続けたいと思います。

今後ともよろしく願いいたします。

ケニアのエネルギー、 住環境事情



JIA国際委員会
一般社団法人
OSA ジャパン
坂田 泉

遠いアフリカ

アフリカは遠い。建築におけるアフリカはとくに遠い。私の建築の師の前川國男は、東京大学工学部建築学科を卒業したその日に、ル・コルビュジエの下で学ぶべく、フランスへ旅立った。前川の世代はもとより、私の、またさらに後の世代にとっても、多くの若き建築家の志の先には欧米諸国があったし、今もそうだろう。大学で学ぶ建築においても、ギリシア、ローマを起点とする建築の歴史が語り継がれ、「近代建築」のヒーローはすべて欧米の建築家だった。私たちが学び、志してきた建築の世界に、アフリカは存在しない。

「文明開化」以来、日本の近代建築家たちの眼は常に欧米に向かい、欧米を「手本」として日本の建築のあり方をさぐるという「二極構造」だった。その後、日本がアジアにおける近代建築のリーダーだった時代を経て、一部の日本の建築家にとってアジアは重要な参照軸になってはいるが、アフリカはまだ遠い。

今でこそ、「アフリカ漬け」のような日々を送っている私にしても、きっかけは前回ご紹介したように偶然の呼びかけだった。その声がなければ、アフリカへの関心は芽生えることはなく、今もアジアの端から遠いアフリカを眺めていただけだろう。

今回は、アフリカを遠く眺めているであろう多くの建築家諸氏のために、ケニアのエネルギー、住環境事情を通して、今のアフリカの一端をご紹介します。

電気をどう届けるか

ケニアの全国電化率は、2014年の大規模な電化政策（地熱発電が主体）の結果、2014年当時の32%から、2018年には75%に達し、拡大傾向にある。^(注1)しかし、「電化」が及んでいるのは主要道路沿いの範囲にとどまり、沿道から離れた地域への配電は十分ではない。例えば、右上の写真の民家。すぐ目の前を電線が走ってはいるが（ここまでが政府のいう「電化」）、家には電気を引いていない。電気を引くための初期工事費、定額の基本料金の負担が難しいからだ。ケニアにおける電化を考える上で重



電気を引かない民家



再生バッテリーによる照明ユニット



廃棄バッテリーの山

要なのは、発電の手段ではなく、電気を小分け、低額で人々の手元に届ける手段であるといえる。

そうした視点から、私たちは2013年、JICA（国際協力機構）の資金により、「再生バッテリープロジェクト」の現地調査を実施した。^(注2)使用済みバッテリーを電氣的な技術により再生し、非電化地域の人々に電気を届ける「容器」として活用するビジネスモデルだ。バッテリーが空になれば、最寄りの売店で充電済みのバッテリーと低額で交換する。電化だけでなく、環境汚染の原因ともなる廃棄バッテリーの有効利用、「バッテリー再生技術」による雇用創出も視野に入れている。このプロジェクトは、廃棄バッテリーの収集コストなどがネックになり、日本企業による事業化には至らなかったが、現地のとくに若年層が廃棄物を元手に簡単な技術で始められる事業としては有効と考えている。

ケニアにおける電化だけを見ても、その改善には、単に技術的手段だけでなく、その導入に伴う技術習得、雇用創出などにも目を配る必要がある。少数のエリートが独占し、その恩恵を蒙る先端技術よりも、多くの人々が関与し、恩恵を分有できる「遅れた」技術のほうが望ましいことも多々ある。途上国の課題解決には、もともと、「SDGs的（「誰一人取り残さない」）」であることが求められる。

ライフラインがない

次にケニアの住環境について、住民の命に直結する「ライフライン」の状況から見てみよう。

ここは、ナイロビでも最大規模のスラムのひとつ、キベラ。ゴミが地層を成し、その底に人々が暮らしている。キベラの住まいにトイレはなく、有料の公衆便所が点在する。公衆便所といっても排泄物はそのまま裏のドブに流すだけ。そのドブのトタン板一枚向こうには人々が暮らしている。

こうしてみると、スラムは生活する上で最悪の環境のように見えるが、お金のない人々にとっては暮らしやすい場所でもある。以前、あるスラムの家で、そこのシングルマザーに子どもの数を聞いたところ、4人と答えたのに、そこには6人いる。「この2人はよその子だけれど、食べさせている。うちの子だっただこかで面倒をみてもらうことがあるからお互いさまよ」ということだった。スラムはお互いがお互いの暮らしを支えあう「互恵精神」にあふれた場所だ。ひとりひとは弱いけれど、全体としては強靱な共同体を形成している。

スラムの問題は、暮らしというより、水、エネルギー、衛生といった、住民の命に直結するライフラインの欠如なのだ。



ゴミの底に暮らす人々



スラムの公衆便所

ライフラインが安定しない

スラムよりはやましな低所得層のアパートを訪れて

みよう。ベランダには色とりどりの洗濯物が干され、活気が感じられる。しかし、その内部は「立体スラム」というべき状況。吹き抜けのネットにぶら下がる袋の正体は住民の排泄物だ。アパートの共同トイレは水が詰まって使えないので、部屋で用を足し、ビニル袋に入れて、吹き抜けに放り投げる。これを住民は「Flying Toilet」と呼んでいる。



低所得層のアパート



吹き抜けにぶら下がる「Flying Toilet」

もう少しましなアパートでは、部屋に水洗トイレがある。しかし、水道は週のうち半分は断水しているから、水が出るうちにポリタンクに入れて、廊下や家の中に積んでおく。その苦労して集めた水をこの水洗トイレは1回で8リットルくらい使ってしまう。生活の場はあっても、ライフラインが安定しないのがこの問題である。



左：廊下に積まれた水の入ったポリタンク
右：貴重な水を浪費する水洗トイレ

生活 (LIVING) と生命 (LIFE) へのアプローチ

このようなケニアの住宅の状況に触れて、私は、ケニアにおける住環境においては、生活 (LIVING) と生命 (LIFE) のそれぞれに対して、異なるアプローチをとるべきではないかと考えるようになる。そして、そのアプローチが「命を守る住宅」へと統合されてゆく。

次回以降は、住宅における「ライフライン」の確保に焦点を当てたプロジェクトを追いながら、私たちの「命を守る住宅」への展望をご紹介したい。

〈注〉

1: 「JICAニュース(2019年8月15日)」による。

https://www.jica.go.jp/topics/2019/20190815_01.html

2: 2012年度JICA協力準備調査プロポーザル採択案件

「バッテリー再生利用による包括的電化推進ビジネス協力準備調査(BOPビジネス連携促進)」、詳細は下記を参照されたい。

https://openjicareport.jica.go.jp/640/640/640_407_12230090.html

テムズ河の流れに乗って左眼右眼

—時間が育てた都市・ロンドンの今—



安部貞司

本稿執筆中に、新型コロナウイルスが世界規模の感染拡大で猛威をふるっている。日常が一変し、社会の空気は変わってしまった、街から人影が消えて世界はマヒした。『Bulletin』秋号が発行の頃にどんな状況になっているか見通せない。徐々に街や生活が動き出してきたが、強権に頼らず日本人の良識を示せるか、緊張感の日々に日常が戻っていることを願うばかりです。

イギリスが今年1月31日に欧州連合(EU)から離脱し、移行期間にコロナ危機が発生して欧州各国はEUの連帯と国家に苦慮している。その「グレート・ブリテン連合王国(United Kingdom)」に1ヵ月間ほど滞在し、民営化で複雑になった英国鉄道で一周して久しぶりにロンドンを探訪した。2012年のオリンピックを機に都市力を回復させたロンドンは、「世界の都市総合ランキング」でトップを走り続けている。近年の英国の都市再生・都市開発の取り組みや英国型CABEとPFIの最新動向を見てきた。

テムズ河の流れに乗って

テムズ河をウォータールー・ピアからロンドン南東のグリニッジまで、水上バスに乗って新しいロンドンの景観を眺めた。パリは真ん中にセーヌ川が流れ、シテ島を中心に両岸に建築が建っている。ロンドンにはテムズ河のほとりの沼地に小さな町として成立した。北側にシティとウエストミンスターがあり、そこから発展し、「シティ・オブ・ロンドン」として今も中心である。

北岸は東へと発展を続け、テムズ河に面した旧港湾地区はウォーターフロント開発でニュータウンが誕生。セントラルロンドン地区は高層ビルの建設ラッシュだ。川向こうといわれた南岸は、新開地に演劇人がシェークスピア・グローブ座を再建。今は再開発が進んで古い煉瓦の倉庫群はお洒落な街に生まれ変わった。ミレニアムブ

プロジェクトの「ミレニアム橋」で両岸がつながり、ウエストミンスター・ブリッジからタワーブリッジに至る遊歩道「ミレニアムマイル」が整備されて河岸を歩ける。そしてカプセル形「大観覧車」、テムズ河上空の「ロープウェイ」が新たな景観になった。

サッチャー政権後の都市戦略と都市再生

パリのような都市計画に比べると、ロンドンは雑然とした印象を受ける。1665年のペスト(黒死病)の流行、翌年のロンドン大火では3日間で市内の大部分が被災し、パリと同様に災害と衛生状態改善で大きく都市改造を行った。その成果が、建築家ジョン・ナッシュが手掛けた「ロンドン大改造計画」。繁華街ピカデリーサーカスからリージェントパークに至る4分円弧のリージェントストリートと、半円形状の連続住宅(パーククレセント)は高級住宅の手法となった。その後、第二次世界大戦後に都市構造の転換を図る「大ロンドン計画」が構想された。

マーガレット・サッチャー首相は、1981年に都市再生特区のEZ(エンタープライズゾーン)を導入した。産業の衰退が進み、英国病から脱するため、産業用地の跡地再生に民間資本を活用する都市政策で、土地に関するさまざまな規制緩和がなされた。92年にジョン・メイヤー首相はPFIを導入、97年にブレア首相がPFIからさらにPPP手法による民間の創意を生かす社会資本整備と、都市政策にデザイン(表層的でない)をキーワードに、CABEによる建築デザインの評価に取り組んだ。

ロンドンには河川港でドックを多くつくり、時代と共に港湾機能を下流に移した。そのドックランズ地区を国家規模の港湾地区再生のためEZに指定。テムズ河から内部に入る水路沿いの荒廃した工業地帯は、スタジアム、選手村、パークに整備され、オリンピックを機に蘇った。「ストラトフォード」は、かつて鉄道の引き込み線や工場跡地。「セントキャサリンズドック」は、古い倉庫群の雰囲気を残して再生。大きく湾曲した半島と縦横に走っている運河「カナリー・ウォーフ」は、新都心として再開発された。ロンドンオリンピックは大会後の都市づくりを重視して都市計画に組み込み、東部の貧困地域の再



テムズ河北岸：多様なデザインの高層ビル群



テムズ河南岸：斬新なデザイン「シャード」



リージェントストリートと、パーククル
セント



「Paddington Central」有名なリトルベ
ニスに至るリージェント運河の岸はナロー
ボートが繋がれている



「Coal Drops Yard」リージェント運河と
弧を描く産業革命時の煉瓦倉庫



映画「ノッテングヒルの恋人」の舞台、
チェルシー地区とポートベロー・マー
ケット

開発はイーストロンドン再生の契機となった。

多様性と歴史の魅力が調和する建築文化

18世紀後半の産業革命時に、物流を担う動脈として全土に運河が建設され、ロンドンも街中を縦横に運河が流れている。都市の文化として動態保存して、運河と一体となった水辺の魅力が息づく開発プロジェクトが進行している。「パディントンセントラル (Paddington Central)」は、パディントン駅の北側(裏側)のかつての鉄道ヤード(貨物港)、リトルベニスからの運河沿いは複合施設に開発された。パディントン駅近くには巨大施設も建設中で、アートなどの最新トレンドの発信地に変化している。「コール・ドロップス・ヤード (Coal Drops Yard)」は、キングスクロス駅とセント・バンクラス駅の間の石炭倉庫と貨物車ヤードの跡地。時代の移り変わりで倉庫は使われなくなり、開発で広場を囲みリージェント運河の水辺に弧を描くように煉瓦造りの建物が配置された新たな街が誕生した。

シティはローマ時代からの世界最古の金融街で、セントポール大聖堂や世界最初の中央銀行のイングランド銀行、王立商品取引所など歴史的な建造物が街並みを構成する趣のあるエリア(スクエアマイル)。その地区に、多くの建築家が斬新なデザインの新しい建築物を設計している。ノーマン・フォスター設計の「スイス・リー本社ビル」「ロンドン市庁舎」「ミレニアムブリッジ」。リチャード・ロジャースは「ロイズ・オブ・ロンドン保険本社ビル」。レンゾ・ピアノによるヨーロッパで最高高さの尖塔型八面体の超高層ビル「ザ・シャード」。ヘルツォーク&ド・ムーロンは元発電所の建物を高さ99mの煙突がシンボリックな現代美術館「テートモダン」に再生した。東部のパービカン地区では、300m(80階)の木造超高層ビルの計画があり、再生可能資源の木造ビルの実現を目指している。

歴史を受け継ぎ生かして使う建物再生・用途転用の都市開発、建築計画に市民によるデザインレビューが行われる。歴史的建築物と新しい建築の共存する多様性や重層性、複合性は変わりゆく街と受け継がれる歴史の魅力が調和するロンドンは「時間が育てた都市」といえる。

RIBA(王立英国建築家協会)で「100周年のバウハウ

ス展」が開催されていた。近代建築・デザイン界に大きな影響を与えた造形学校「バウハウス」はグロピウスが設立して14年間しか活動していないが(ナチスの圧政で閉鎖)、今もモダンデザインの源流としてロンドンでも再び注目されているという。

人本位型社会・サービス型社会を読む

管理型社会・マニュアル社会で、全てが硬直して画一的ルール、一律に同じ条件であることを「平等」と考える日本に対して、英国は人本位型社会・サービス型社会といえる。自由な気風は、多様で弾力的で一つの考え方にとらわれない柔軟な「融通無碍^{ゆううずむむげ}」の社会的価値観にある。街づくりの発想も人優先社会や高齢化社会に対応し、尊厳への配慮、介助者を必要としないことを前提にした「福祉のない街づくり」といえる。歩行者優先の横断歩道のルール。バス・地下鉄の乗り換え、街路のサインなども訪れる人々の立場で誰でもわかりやすい。電車に愛犬も自転車も同乗できる。一般住宅にも生涯安全に住み続けられる評価基準があると聞いた。

観光資源としてロンドンの都市戦略に位置付けられているマーケットは、中世から活発で、都市の起源であり結節点として発展した。「Streetマーケット」は多くが道路で開催されている、Streetは交通空間としての道路と自由に使える公共空間でもある。市内には、いたるところに公園や広場があるが、芝生立ち入り禁止などの警告看板、外国人へのマナー啓発看板も見ない。レストランはペットも同席でき、ハラルやベジタリアン、ビーガンのメニューも準備され、Leftoversは当たり前を持ち帰り、食品ロスや脱プラ社会に取り組んでいる。

大英博物館や世界的な美術館・博物館は無料の施設が多く、文化が都市に必要な不可欠という市民意識を共有している。多くの人がボランティアや慈善活動に参加して活躍している姿は印象的で貴重な社会資源となっている。物乞いの路上生活者に恵む人の姿もよく見かける。社会が連帯する精神が根底にあり、市民団体が活躍できる社会システムができています。出自や持ち味もさまざまな民族の共生社会を実現している。見えない社会デザインとしての都市デザイン、人間中心のまちづくりを再認識した。

山口太郎氏に聞く ヴィンテージ家具を通じて 北欧と長く関わっていききたい

今回お話をうかがったのは、神奈川県伊勢原市にある「北欧家具 talo」の店主山口太郎さん。広い倉庫のような店内には、フィンランドやデンマークで買い付けたヴィンテージ家具がずらりと並び、そのひとつひとつが丁寧にリペアされ、また良心的な価格で販売されています。北欧家具との出会いや買い付けについて、さらにヴィンテージ資源の今後についてうかがいました。



— 北欧家具に興味をもったきっかけを教えてください。

24、5歳の時、何か自分で仕事をしたいと思い、テレビで見た買い付けの仕事がかっこよく見えたので、輸入業をするためにアメリカに行きました。しかしうまくいかず、父が経営していたリサイクル屋を手伝うことになりました。正直リサイクル屋なんてゴミ拾いのようなものだと思っていたのですが、やってみると汚いものを磨くのが自分にしっくりきたのです。その後リサイクル屋をやりながら2、3年海外で買い付けを続けるのですが、やはりうまくいかず、すっかり熱意が削ぎ落とされてしまいました。

そんな時に母から幼なじみの関本竜太さん（現JIA正会員／広報委員）がフィンランドにいると聞き、気分転換に押しかけたのです。幼なじみといっても10年以上空白があったのですが、友達ヅラして遊びに行きました（笑）。そこからすべてが始まりました。

— フィンランドでどんな出会いがあったのでしょうか。

関本さんがいろいろなところに連れて行ってくれました。「これは誰がデザインした」「これは誰が設計した」と丁寧に教えてくれて、とくに「このゴミ箱は誰がデザインした」と駆で教えてもらった時は衝撃でした。ゴミ箱をデザイン？ゴミ箱ってホームセンターで売ってるものじゃないの？と。“誰かがデザインした”ということがとても新鮮で、それまで家具に興味はなかったのですが、次第に面白いと思うようになり、4日間の滞在中にヴィンテージショップに連れて行ってもらい、貯金のほぼ全額30万円でエーロ・アールニオやウリヨ・クッカペーロなどの家具を6、7点買いました。その時は買い付けが自分の仕事になるとは思っておらず、とにかく自分が情熱を傾けられるものが見つかったと感じました。

しかし、数ヶ月待っても買った家具が届かない。購入したヴィンテージショップの店主ユッカは、家具を30万円分買って、送料は3万円くらいと言いました。今、冷静に考えると送料がそんな安いわけない。だまされたと思って、直接文句を言いまたフィンランドに行きま

した。そうしたら「よく来たな」と歓迎されて……。文句を言うつもりが今度は倍買ってしまいました。そこから8ヶ月間また届かず、さすがに「俺は2回も何をやってるんだらう…」と諦めていたら、1回目の荷物と一緒にすべて無事届いたのです。しかも何点かおまけつきで。

— 届いた家具はどうしたのですか。

当時都内のインテリアショップのバイヤーが神奈川近郊でミッドセンチュリーや昭和家具を探し回っていた時期で、リサイクル屋に並べたら簡単に売れたのです。だからまたフィンランドに買い付けに足を運ぶようになり、年に1回が次第に2回3回と増えていきました。

そして32歳の時に北欧家具一本で食べていこうと決心し、独立しました。店名の「talo」はフィンランド語で「家」という意味なんです。自分の名前と発音が同じということで店名にしました。

不思議なことに、最初にトラブルのあったヴィンテージショップのユッカとは、そのあとパートナーとして一緒に仕事をしていくことになりました。彼はとにかくセンスがよかったですし、何も知らない僕をデンマークやスウェーデンの有力店の店主とつないでくれました。僕が独立した時にすでにそういう人脈ができていたのは、すべて彼のおかげです。その関係は彼がスイスに引っ越すまで、約10年間続きました。

— taloではヴィンテージ家具を現地と変わらない価格で販売しています。なぜそれが可能なのですか。

この仕事でネックになるのは物流コストです。良いものを買って高く売る選択肢もありますが、あえてそうせず、輸入する点数を増やして1個あたりの輸送コストを下げることでビジネスを成り立たせています。当時北欧ヴィンテージ家具は5万円で買ったならそこに渡航経費なども乗せて売るのが当たり前でした。でもそれではいつまでも企業として成長しません。企業努力をすれば長く続けられるし、それが差別化にも繋がると考えました。他店と比べて安価な販売価格かもしれませんが、自分と

してはフェアな値段だと思っています。

1点でも多く運ぶために、コンテナに無駄なく入るようにボリュームを計算しながら買い付けます。買うものは椅子だけではなく大きさはさまざまですが、目安としてコンテナ1本に600ピースくらい、400を割らないようにしています。

—商品はどのようにして見つけるのですか。

昔は歩いて探しましたが、今はスマホで情報が得られる時代です。どこに良いものがあるかという情報をいかに得られるかが大事になってきています。情報をもろうためにも彼らには誠実に向き合わないといけません。北欧人に対してディスカウントを押しつけてしまうと2回目は絶対にありません。彼らはフェアという言葉が好きで、値切ることもふっかけることもしないのです。

—買い付けた家具はどのように集めていくのですか。

コンテナを置いている場所に持って来てもらうか取りに行きます。ここがスキルの見せどころなんです。輸入屋は、まず第一にコンテナに無駄なく収める感覚がないとできません。2つ目に大事なのは手配。北欧人のマインドと生活リズムを理解して手配することが重要で、買い付けは4番目か5番目。例えば土日は働かせないなど、気持ちよく動いてもらえるテクニックがあるかどうか。僕はヨーロッパ人とのマインドの通訳ができます。怪しい人には怪しい人への対応があるし、その対応を最初の段階で見極められるかが買い付けでは非常に重要です。

—リペアにもこだわりがあるそうですね。

人が使うものは清潔感がないとダメだと思っていて、見た目がヴィンテージでも、機能が劣っていてはいけないということが自分の中の線引きです。ガタつきはいいけれどゆるみはダメ。ただ直せばいいというものではなく、直して台無しになる場合もあります。そのさじ加減を社員に共有してもらうには時間がかかります。

その他にも、張り地を張り替えるサービスや、工房で工具を自由に使ってもらえるサービスも行っています。日本は家具を自分で直す文化がないため、直して使い続けるという考えが欠落してしまっています。家具を買ってもなにかあったら捨てればいいという感覚がまだ強く、結婚したり子どもが生まれたら買い換える。つまり買い換えることをベースに家具を買いに行きます。しかし、本来、子どもたちに使わせるために何を買うか、結婚してからも使えるように何を選ぶかが重要だと思うのです。日々その思いで頑張っています。



膨大な数の北欧家具が並ぶ talo の店内

—一方でヴィンテージ家具は今後は買い付けも難しくなるのではないのでしょうか。

ヴィンテージ家具は完全に枯渇しています。これどうにもならないのですが、自分のビジネスでは、ものが少なくなり高値で売らなくてはならなくなるところを、自分が動かしている物流でももとなかった利益を上げることで、売値の上昇を抑えたいと考えています。具体的には、数年前にフィンランドに物流センターを構えました。これまでに培った物流ノウハウを活かし、将来的には日本人が買い付けたものや、フィンランドのアーティストが日本に作品を送りたい時に利用してもらうのが目標です。

今はコロナで買い付けにも行けませんが、現地の人が情報をくれたりして、今のような状況でも仕入れができないわけではありません。これまで築いた信頼関係が双方向のものであったことを実感しました。

それから、いつの頃からかヴィンテージを扱うよりも、フィンランドに行くことが自分の生きがいになっています。若い時から日本での生活がどこか窮屈に感じていました。しかし、フィンランドに行ってピタッときたのです。自分が自分でいられる場所だと感じました。だからフィンランドに行けるような仕事を続けていきたいですし、これからはフィンランドの方たちに何かを還元できるようにしていきたいと思っています。

—大変貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2020年6月26日 北欧家具 taloにて

聞き手：関本竜太・会田友朗・中澤克秀(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

山口 太郎 (やまぐち たろう)

1973年神奈川県生まれ。神奈川県伊勢原にて北欧のヴィンテージ家具の買付・販売・修理を行う北欧家具taloの代表。20代半ばのフィンランド旅行をきっかけにヴィンテージ北欧家具の販売を開始。現在はフィンランドにオフィスを開設し、年に10回以上渡航しながら、年間の1/3を北欧で過ごし、北欧の文化や生活の理解向上に全力を注いでいる。

ライフワークが プロポーザル勝利につながる



赤羽吉人

「建築のはじまりはプロポーザルかコンペに限る」という学校教育を受けて巣立ったにもかかわらず、なかなかその通りにいかないのが設計事務所の常であることは、多くの建築家諸氏が抱えているジレンマであって、私も同様である。せめて特命仕事の比率を上げることに努力しているが、入札をせず済む状況にはならない。

そんな中で最近、プロポーザルに勝って獲得した仕事があったので、そのきっかけや取り組んだ経緯を紹介することにした。一般の建築設計とは趣が異なるので、あまり参考にはならないかもしれないが、建築のはじまり方を探る一例となれば幸いである。

しがたない建築家おじさん(私)唯一の取り柄はスキージャンプ台の設計だと言ったら、何それ(?)って反応が返ってくるかな。幸運にも33年前に長野五輪のジャンプ台を手がけて以来、ライフワークと位置付けて、ずっとケアを続けてきた。これが効いた。5年前、友人を通じて舞い込んだ国際プロポーザルへの誘いに乗って、プレゼンに挑戦したことで、楽しい経験をさせてもらった。

プロジェクトは、強風下の平昌五輪ジャンプ台で、風の影響を排除して安全に競技が開催できる防風対策施設の設計と、そのシステムの供給・設置を含めたデザインビルド案件で、韓国のスキー関連企業とのJVで取り組んだ。プレゼンでは、イタリア、スロベニア等経験豊かな欧州からの参加者を破って勝利した。下馬評では2番手だったそうだが、白馬での実績と、子どもたちが安全に練習できる環境であるために、仮設でなく本設にすべきと主張したことが決め手になったと思っている。

五輪という巨大プロジェクトの中で、関係者に日本人がごくわずかという孤立感はあったが、現地では、建築家の職能が確立されているという感触を、ことあるごとに感じ取ることができ、日本国内では経験できない心地良さの中で仕事を進められたことは大きな驚きであった。

実際のプロジェクトでは、発注者から私がプロジェクト全体の責任者に位置付けられたため、成果達成の重圧がのし掛かって、そう容易な仕事ではなかったが、時間

的制約がある中で、進むだけという緊張感で鼓舞し続けた結果、満足のいく成果を挙げられたと自負している。

私自身は結構な数のジャンプ台設計を手がけているので、防風ネットの設計経験もあったが、このプロジェクトでは多くの問題点が待ち構えていた。

現地は明らかに強風が通り抜ける地形で、ジャンプ台の建設適地でないことは明白であり、一望できる周辺の山の稜線には風力発電の風車が何十基も林立していて、現地を知れば知るほど不安要因が増え続けた。要求される減風効果の目標値が熾烈であって、ネットで発揮できる性能なのか確信が持てなかった。協力を期待した国内のネット専門企業に海外経験がなく、一方的に撤退されてしまったので、製作上のノウハウを一から習得しなければならなかった。海外案件のノウハウが蓄積されている組織なら問題ないことでも、私たちにとっては一から手探りで解決策を探さなければならなかった。

設計だけでなく、物品納入という、それも防風ネット装置という類例のないシステムを国内で調達して輸出するプロジェクトで、為替変動あり、先方の大統領の失脚による国内政治情勢の変化あり、南北問題の不協和音による国際政治情勢の緊迫化ありと、現地へ出張するたびに緊張が絶えなかった。

周囲からは、やめた方が良いとか、売上回収リスクをどう回避するかとか、いろいろ雑音が聞こえてきたが、途中で挫折することなく、やりきることができたのは、大げさに言えば日の丸を背負っているという自負があったからだろうか。

次なる納得のいく「建築のはじまり」にいつどこで会えるのかはわからないが、ぼちぼち続けていこうと思う。



平昌五輪ジャンプ台でのプロジェクトメンバー

With コロナ社会における建築まちづくり

—コロナ災害復興フェーズフリーデザイン—



建築まちづくり委員会
委員長
連 健夫

With コロナ社会における建築やまちづくりへの影響は、人が集まって話し合うことが難しくなることである。しかし、オンラインミーティングが一般化する中で、意外と便利であり、遠隔地でも参加できる良さも浮き彫りになってきた。またグループワークも簡単にできるので、ワークショップなどで重宝する。もちろんオンラインに縁遠い参加者にはリアルが大切なので、オンラインとの併用、つまり「ハイブリッドな対応」と「ハイブリッドな思考」が大切になってくる。

建築での変化

テレワークなど働き方の多様化により、オフィスもフレキシブルな働き方を許容する形に変わってきている。従来の島型の机配置が、フリーアドレスの机となり、好きな場所で仕事ができるようになる。これに必要なのは、個別ワークができる個別ブース、ミーティングができる会議室などである。また創造的機会の意味合いで、ラウンジなどゆとりの場が重宝される。つまり、従来よりもさらに快適なデザインが求められるのである。

このフリーアドレスはシェアオフィスにも用いられており、それを借りる需要も増えることが予想されている。住宅では、家族にディスターブされないテレワークの場が必要となり、ある意味、住宅が一部事務所化すると考えられる。また家に居る時間が増えるため、より気持ちの良い空間デザインが求められることになる。

まちづくりでの変化

コロナ禍で浜松市の「まちなかオープンテラス」は興味深い。三密を避けるべく公共空間である歩道を店舗の一部として使う社会実験である。国交省は4年前に「道を活用した地域活動の円滑のためのガイドライン」を作成、運用しているが、このコロナ禍の対応として、「新型コロナウイルス感染症の影響に対応するための沿道飲食店等の路上利用に伴う道路占有の取扱い」で、11月末までは道路使用料は取らないという思い切った時限措置を実施した。訪問し、ヒアリングした中で、参加募集期間の短さや2mの歩く場所の確保の難しさ等の課題は見られたが、オープンエアの空間利用の良さが感じられ、今

後増えてくることは間違いない。つまり公道の柔軟な使い方である。公開空地の利用とともに、今後のまちづくりにおける大きなテーマとなると思われる。これに大切なのは、行政と市民という二者の関係ではなく、第三者の専門家の関与である。双方の立場を理解した上で、良いものにすべくアイデアをブレンドするのである。

ファシリテーターとしての建築家

この第三者の専門家としてのファシリテーター（促進者、調整者）であるが、まちづくりの実際には、専門性を持った上でのファシリテーションが有効で、この点、建築家は馴染みやすい。ただ、まちづくりは住民が主体であり、ファシリテーターは黒子的役割を担うので、上から目線では決してうまくいかない。With コロナ社会における働き方の多様化や店舗の変化の話をした、これらはいくまで主体は利用者である。空間づくりと経済性とのバランスとなり、それを尊重した上での関与となる。つまり、それを支えるアドバイザーとしての役割が強くなり、プレイヤーの役割が少なくなることを認識すべきであろう。

コロナ災害復興フェーズフリーデザイン

コロナ禍は災害である。災害復興には時間がかかり、With コロナ社会におけるデザインを考えることになる。平常時でも災害時でも役に立つデザインをフェーズフリーデザインと言うが、With コロナ社会においてはフェーズフリーデザインがさらに求められよう。建物周りの外部空間はトリアージや災害物資の配給等に役に立つが、それを平常時におけるオープンエアの気持ちのよい場所にデザインすることは可能である。そのアイデアとデザインを利用者との協働の中で実現するためには、やはりファシリテーションが必要になるのである。



浜松市「まちなかオープンテラス」の社会実験

団地遺産



木下庸子

我が国の建築の「いのち」は、欧米に比べて実にはかない。火災に弱い木造建築ならともかく、耐火性能を誇るRC造の集合住宅も悲しいかな同様である。戦後の住宅難の復興に一役買い、1955年設立の日本住宅公団によって昭和30年代、40年代に大量生産された団地もしかりである。それら団地は1985年に、当時の住宅・都市整備公団により、老朽化を理由に昭和30年代竣工の団地からの建て替え計画が発表され、以来徐々に建て替えが進行中である。かつて「配置の名作」として知られ、植田実さんと私の共著である『いえ 団地 まち—公団住宅 設計計画史—』（以下『いえ 団地 まち』）でも取り上げた赤羽台団地も、1962（昭和37）年竣工であるが故に、2000年に建て替え事業が着手され、現在建て替え計画はほぼ終盤を迎えている。

建て替え前の赤羽台団地は幾何学的配置を誇る団地であった。敷地は元陸軍被服廠跡地で、高台の立地にあった。また、それまで主流だった郊外型の団地とは違った、23区内で初めての3,000戸を超える大規模かつ高密度の団地開発だったので、国や都からは将来のモデルとなる団地計画が期待された。当時公団では、量産のために標準設計が繰り返し採用されていたのだが、赤羽台団地においては都市型住宅のモデル開発が設計の念頭に置かれ、新しい住戸タイプがいくつも誕生した。駅からのアイ・ストップとして配置されたスターハウス7棟も、景観を形成する要素としての役割を果たすべく採用された。

先に述べた『いえ 団地 まち』は、私が独立行政法人都市再生機構（以下UR都市機構）に在籍した2005年～2007年の間に視察した130余の団地から、公団設立年にあたる1955年にちなんで55の名作団地を、視察を共にした植田さんのアドバイスも受けながら、2人の主観で選出し解説した著書である。『いえ 団地 まち』で名作として取り上げた、赤羽台団地を含む多くの団地が、UR都市機構の建て替え計画の仕組みにより、1つ、2つと、命を絶っていくのを目の当たりにしながら、新たな団地再生のきっかけを見出す必要性を切に感じていた。

そんなもやもやした思いが、私を一般財団法人住総研

（以下、住総研）の助成事業に応募させるきっかけとなり、住総研の実践助成に『団地力』の活用による団地再生方法の実践的研究」と題して応募したところ、幸運にも2018年度の実践助成に採択された。しかし実践研究を始めると、団地におけるワークショップの開催など、今まで繰り返し行われてきた試みだけでは団地再生のオルタナティブを見出すことは容易でないことに気づかされたのである。

そんななか、『いえ 団地 まち』の共著者である植田実さんが大きなヒントを与えてくれた。それは、従来通りの団地住人とその生活を中心とした団地再生の考え方から頭をリセットして、「50年以上住み続けられたRC造の公団住宅を、近代文化遺産として捉える」という考え方であった。文化財保護法に規定される登録文化財は「原則として、築後50年を経過し、かつ一定の基準に該当する建築物等が登録の対象」となる。とすると、初期公団団地に現存する建築物の多くは、すでに50年が経過しておりこれに該当するのである。実に画期的な「団地再生」の考え方に身震いする思いであった。

植田さんからヒントをいただいた時点では、実は具体的な団地はすぐには頭に描けなかった。しかし、興奮冷めやらぬうちに「団地再生の新たな可能性」をUR都市機構のメンバーに打ち明けたところ、偶然にも赤羽台団地の建て替え計画において未だ現存する3棟のスターハウスと1棟の板状住棟の「いのち」が問われている時期と重なった。結果、赤羽台団地に残る歴史的遺産は2019年12月5日に「草創期の都市型住宅団地」として「登録有形文化財（建造物）」に登録された。実に、「団地再生」の新たな展開となった。今後、「団地ヘリテージ」という概念が、団地再生の1つの可能性として大いに期待がかかるところである。

旧赤羽台団地 スターハウス
（写真提供：UR都市機構
2018年9月撮影）

抱負を語る

地域に生きる
建築家として

栗原 弘



昨年、JIAに入会し1年余が過ぎました。建築家として独立し18年が過ぎ、世情とともに仕事の内容、職域が大きく変わってきたように感じます。栃木県佐野市で事務所を立ち上げ、当初～10年までは新築住宅を中心とした建築を多く設計していましたが、現在ではさまざまな非住宅案件の設計のほか、既存建築(中古住宅、空き家等、その他)の調査業務、リノベーションなど、これまでつくられた建築を改修・再生する仕事が増えてきました。建築の改修・再生の増加、その背景には空き家問題が隣り合わせであるのも影響していることから、設計という仕事の在り方も変わってきているように思えます。

独立当初から「地域に生きる建築家」になろう、という思いで活動してきましたが、その思いをさらに強いものにしたのは、6年ほど前に、私の住む自治会で公民館建設(建て替え)の計画が立ち上がったことからでした。周辺は以前は田畑が広がる長閑なところでしたが、区画整理事業によるまちづくりが進められ、2つの大規模商業施設を核にして住宅地が広がり、急激な人口増加で手狭になった従来の公民館では地域活動や会議等の行事ができない、ということから新公民館建設が決定しました。ありがたいことに、新公民館建設の企画から携わることになり大変嬉しい思いでした。いざ始まると限られた予算と地域住民の要望とのせめぎ合いで、計画がまとまるまで1年半という時間を費やし、紆余曲折しましたが、5年前に無事竣工して現在では地域活動の核として住民が利用しています。その後、多くの住民から「広くて使いやすい」などの言葉をいただき、地元でやっていて良かった、もっと貢献したい、そう思うようになりました。

今後、地域に生きる建築家としてJIAの活動にも積極的に参加し、見聞を広げていきたいと思えます。



佐野市・高萩町公民館

抱負を語る

暮らしの周縁を
拡張する

加藤大作



2015年に設計事務所を設立してから5年を経て、この度JIAに入会しました。6年目にあたる今年のはじめから新たに千葉県勝浦市で住宅プロジェクトがスタートしたその矢先、新型コロナウイルスによる感染症が世界中で確認され、その感染力の高さから間もなくパンデミックに突入し世界は一変しました。他人との接触を避けて感染を防ぐ「社会的距離」戦略に基づき、世界中で都市封鎖や都市間移動の激減が相次ぎ、7月末現在も先行きが見通せる状況にはありません。日本においても感染者の急増で4月7日に緊急事態宣言が発令され、外出自粛要請、学校の休校要請、店舗・施設などの使用制限要請、イベントの中止・延期要請が行われ、これまで通りの通勤や通学、一堂に集まるという生活様式が見直されると同時に、その基盤である都市や建築空間が持つ、ある意味非効率で不自由な側面が浮き彫りになりました。

近代社会が築いてきたこの不自由な構造の改変に、日頃から距離やスケールを扱い、空間や時間を思考する建築家が果たす役割は大きいはずです。「社会的距離」を前提としてこれまでの都市や建築空間を読み替え、編集できないだろうか。まずは暮らしの周縁に潜む大小さまざまな問題を縦横無尽にスケール横断しながら解きほぐし繋いでいきたい。JIAへの入会を機に、先輩方のこれまでの実践から多くを学び、人間以外のものを含めた他者と共存する持続的な社会の一助となるべく、建築の実践を通して模索していきたい。差し当たり勝浦市での住宅プロジェクトを通して。



みずみずしい新緑が生い茂る勝浦市の計画地

NPO日本デザイン協会(JDA)セミナー

「イタリアン・セオリー」から読めること(後編)と 「現勢力 vs 潜勢力」を超えた社会概念へ

2019年2月26日にJIA館にて開催されたセミナーの記録を4回に分けて掲載しています。

登壇者：神田順(東大名誉教授)、山本想太郎(日本建築家協会デザイン部会長)、

連健夫(日本建築まちづくり適正支援機構代表理事)、大倉富美雄(進行)

共催：(公社)日本建築家協会(JIA)関東甲信越支部デザイン部会

NPO日本デザイン協会理事長

元デザイン部会長

大倉富美雄

「イタリアン・セオリー」から読めること

神田 順 (東京大学大名誉教授)

(前回の続き)

規制強化の意味

「規制強化の意味」についてですが、芸術や設計、建築の価値は、法律で決めるものではないと思います。価値を評価できる人がいれば、そんなルールはいりません。例えば構造について、地震に対して安全かどうかを、「基準法上、合法だ」とか、「品確法で2等級だから1.25倍安全だ」などと言っても、スケールのつけ方もおかしいですし、地盤をどう評価しているかでだいぶ違うのに、1.25倍して何なのかということになる。本来の価値で議論しないから、ますますお金だけが先行していく。最近の杭工事問題など、大企業は壊して建て替えると言いますが、それをすると膨大な廃材が出て、無駄な経費も掛かり、結局大企業しかできなくなる。そういう論理で社会は動いています。芸術や設計がそれに当てはめられないように動いていくのが建築家であり専門家で、「建築基本法」の考え方もその方向に沿っているのです。

法律は作る側に都合良く、御し易くなり、形骸化する。

持続可能なエコ社会に合った法律の制定を！

「建築基本法」だけ作ってもうまくいかないなら、金銭で評価しないならどこで評価するのかを、ちゃんとした人がきちんとした公平の場で行うことが大切です。なぜなら専門家が専門家として民意公的に認知されていないから。コンペも公開の場でやれば全然ちがう。それはまさに選ぶ人の見識が問われるわけですから。

国の手法は全国一律なので、規制強化はすべての企業に同等に作用します。大企業で数多く生産、販売するところが効率よく、有利です。それを上回る価値ができて、人々がそれを理解し、大企業の大量生産に飽きたら、大企業だけが栄えることはなくなるとは思います……。不公平なルール、時代遅れのルールを変えるには、専門家、

職人、現場の人間が、市民の立場で立法する必要がある。それは地区の住民協定でもいいのです。

「法律は誰が作るのか」によって生じる問題をいくつか提起します。まず、文章にするため、形式化・形骸化して質が見失われる。なぜ形式化・形骸化するのか？官僚が「ちゃんとやっています」と示して、責任を取らない運用主体の問題。それにより、行政的な運用はしやすくなる。ルールを守る人は御し易くなる。質が大切だと言えば、その人の中身が問われるわけです。

また、法律が、生き方の選択肢を制限する現実。権力のみが例外を許容する。良い例が車のスピード違反や駐車違反の取り締まり。取り締まる側にとって必要な時だけ取り締まる。中身が分からなくても仕事できて、責任は問われない、そういう時代になっています。

では、持続可能を規範とした建築の社会制度のための法律とは？右肩上がりの社会を理想とするのではなく、持続可能社会に合った法律が必要だということです。

専門家が適否を判断するシステム「ピア・レビュー」制度

これからの「社会に向けて」ですが、経済効率優先と法令厳格化が、大量生産と最低の質によるスクラップアンドビルドを生む。GDPは増えますが生活は豊かにならない。そういう時代になっています。そして、自治体として、地域ごとの特性を規制に反映する努力が必要です。また、構造物に安全性を組み込むことができるのは構造技術者であるが故に、構造技術者が法による最低基準と確認審査に代わる、建築制度の構築(ピア・レビュー)を進めるべきでしょう。

人に寄り添わない考え方の空しさ

私は経済学者の宇沢弘文からもヒントを得ていて、社会的共通資本、つまり建物や財産だけが資本なのではなく、教育制度のように制度そのものも社会資本なのです。それは自分たちが作るべきなのです。建築制度なんてまさに社会資本なので、これを本来の建築の価値で評価される制度にしなければなりません。

「現勢力 vs 潜勢力」を超えた社会概念へ

— 新しい勢力を作っても、それは人を分類しただけ。
人間の限界に迫れば、絶対的な価値など無い。
それを承知で話し合うしかない—

山本想太郎（日本建築家協会デザイン部会長）

「大衆の力」が必ずしも良いわけではない

このセミナーの主題は現代哲学、政治哲学です。建築の制度もこういうテーマでは意外と語られていません。

前号紹介のアガンベンの『ホモ・サケル』にある Constituting Power（合意形成による力、以下で「潜勢力」とも）と Constituted Power（既成権力の無理な押し付け、「現勢力」）をどう調停するかは、以降の哲学のひとつの議題ともなっている重要事項です。一般的な解説では「構成する権力」と「構成された権力」ということ。これは遡ると、アリストテレスの「デュナミス」と「エネルゲイア」にもたどり着く。「デュナミス」は「潜勢力」で「潜在している力」。「エネルゲイア」は「現勢力」で、「今、発動している力」ということで、古くからある論法です。

そして現代哲学においては、アガンベンの「潜勢力」から「現勢力」が「決定的に分離されていなければならない」という主意をどう解釈するかが重要になってきます。

なぜアガンベンがこういう言い方をしたかという点、「マルチチュード^{注1}」が、彼にとって願望として、あり得ないように願う姿勢として示すように、トップダウン型に対するボトムアップ的な力が「現勢力」を打ち破れるという楽観的イメージを持つのがネグリ^{注2}で、エスポジト^{注2}から見ると2つ前の世代のような考え方だからなのです。

潜在する力が、現在の力に取って代わるとすれば、それは同じことで、新しい現勢力ができることになってしまふ。たとえば政治家ではなく専門家が主導すべきとなった時に、今度はその専門家が認めないものは認めない、となれば新しい現勢力ができたということになってしまいます。その勢力の移行の問題をアガンベンは提起したのです。その問題に対してどうすべきかというのが今の政治哲学のテーマであり、手放しで「マルチチュード」を肯定している局面ではない、ということをまず念押ししておきたいと思います。

権力は生を区別する

どういうルールでモノ、あるいは知的生産者を選ぶのか、建築学会や学術会議で進めている建築設計などの公共調達に関する法整備についても、正しい選び方をしたところで、新しいルールができればそれが権力を持つというだけ。結局、法整備ができて、それで選ばれた人

が現勢力になるしかない、それを選んでいただけだというのがアガンベンの考え方です。

法律は「規制する側」と「規制される側」という2つの立場をつくるものであり、これを公共調達で言えば「調達する者」と「調達される者」ですが、このように分離、対立している限りは、現勢力が新しい力に取って代わられたと言っても、同じ構造が繰り返されているだけになります。

アガンベンがこういう問題意識を持ったのは、彼の言う「生政治」の問題に関係します。

もし行動を人間の欲望に任せてしまえば、自己崩壊に繋がるのではないか、だから法規制による「秩序」と「保護」が必要である、とホップズは考えました。そこから始まったのが、人間を保護するための、あるいは生かすための近代政治理念であり、「生政治」はその考えに立っています。

この考え方には、ナチズムや今の移民問題などの排除的な政治を生んでしまう側面もあり、「保護するためには他を殺しても構わない」、という極端な原理にすらなりかねないのです。

つまり2つの対立する立場が存在する限り、「生政治」が抱える問題は解決できない。「政治的な生(ビオス)」と、「生そのもの(ゾーエ)」を峻別する「生政治」という権力を、そのどちらにも属さない「ホモ・サケル」という存在を提示することで照らし出したのがアガンベンなのです。

皆で話し合っていくしかない

以上のようなアガンベンを起点とした考察から、公共調達に本質的な公共性をもたらすならば、「選ぶ者」と「選ばれる者」という区別を存在させる以外の方法を考えなければならないのではないのでしょうか。「公共が選ぶ」ということを変えて、「選ぶ者自体も選ばれる」ということにすれば、その区別はなくなっていきます。

神田さんがご提案された規制に関して言えば、規制を解除すればよいのかと言えばそうではない。では、今の規制ではないルールを作ればよいのかといえば、先ほどの権力の問題である、例えば「大衆」というような新しい権力を作ってしまう。

まず法律という枠組みでやるかどうかの方が難しいところで、神田さんのおっしゃっていた「価値は法律で決めるべきではない」ですが、結局なにかしら法律を作ったとたんに現実には価値を決めてしまっていることになるのです。環境問題も人の生命の問題も、絶対的な価値はない。それを法律で定めることの危険性はある。何ができるのかはまだ結論のある話ではないけれど、「みんなで話し合っていく」という方法論しかないのかもしれない。

(次号に続く)

(注1) 人と人が寄り添うことで生まれる力

(注2) 『イタリアン・セオリー』で扱う哲学者。ネグリ、アガンベン、エスポジトは80代、70代、60代と年齢差があり、時代感覚の差がある。 Bulletin 2020 秋号

三多摩地域会

“もの”の保存、“こと”の保存

—未来へ継承したい住民による街並み保全活動—



三多摩地域会
高田典夫

建造物の保存というと、2017年、2020年とあまり間をおかずに訪れてその空間を体験したル・ランシーのノートルダム教会(写真1)のことを思い出します。オーギュスト・ペレの傑作であるこの教会は、現役の地域の教会として使われていて、1923年の竣工から100年近く経っているとは思えないほど美しく保たれている佇まいに驚き、感動します。そして、保存のための記念物や博物館ではなく、本来の使い方そのままを使い続けられるということの大切さを感じます。本来建造物はその生きている姿を保ちつつ、その環境とともに存するべきであろうと考えます。あらためてこのようなことを思ったのは、A.レーモンド設計の旧赤星鉄馬邸(写真2)の保存／継承の問題がきっかけです。

このような“もの”の保存／継承とともに、日常的な生活を通してその環境を維持し、新たな価値を付加させていこうとする住民の側からのまちづくり活動のような“こと”の保存も継承する必要があると考えます。

“もの”の保存、“こと”の保存

自分の住んでいる環境に関して関心を持って見守り、日常的な観察から、些細な変化も見逃さずにチェックし、その変化が及ばしかねない結果について想いを馳せ、必要と思えば隣人たちを集めて行動を起こすような住民がいる街は、住み続けられる街になっていくのだろうし、ことさら声を上げて「(住民参加の)まちづくり」などと言わなくても、日常的な生活の中で住民が「まちづくり」に関わっているということなのでしょう。「住み続けられる住環境」というのは、そのような先人たちの活動が積み重なってできてきたものといえます。つまり、良好



写真3 武蔵野市西久保1丁目の街路景観



図1 武蔵野らしさを大切にしたいまちづくりの考え方

大切にしたいまちづくりの考え方	
これまでの取り組みを踏まえて、三鷹駅北口地区におけるまちづくりにおいて大切にしたい考え方をまとめました。今後、これを多くの関係者の皆様と共有して、具体的なまちづくりに繋げていきたいと思っております。 2019年3月 三鷹駅北口地区まちづくり準備会	
武蔵野らしさを大切にしたいまちづくり	
都庁直轄をしっかりとつくることで、街全体の価値を高め、街そのものを牽引するエリアにしたい、多くの世代が暮らしやすい。	
3つの軸《五国上水、かたらいの道、中央通りの数木》による景観形成	
● 五国上水、かたらいの道、中央通りの数木は重要な景観資源。これらの景観資源を軸としてエリア全体の景観形成を行う。	
● 3つの景観軸は駅前ですつなり、五国上水は緑豊かな住宅地との繋がりを、かたらいの道は文化施設との繋がりを、中央通りの数木は市役所商店街の賑わいとの繋がりを駅前周辺に感じさせている。これらの繋がりを感じさせる景観を今よりもっと強調する。	
● 3つの景観軸に面する街並みを整える。	
商業地の魅力づくり	
遊戯施設や風情店は今以上に増え続けていく。そのために、遊戯施設や風情店ではない用途で、駅周辺の魅力を高め、経済的に成り立つ方法を商業関係者と一緒に考えたい。	
● 街から訪れる人も、街の雰囲気を楽しめる場所にしたい。	
● 公有地や未利用地をもちまして、文教施設、保育施設などの公共的な施設を導入したい。	
歩いて楽しむまちづくり	
● 市の自転車駐輪場の敷地を活用して、歩行者を第一に考える駅周辺の交通環境を改善したい。	
● 歩行者優先、自転車走行の安全性を確保した交通環境を整えたい。	
住宅地の価値づくり	
● 西久保一丁目をはじめとする、住宅地の落ちついた佇まいを守ってきたい。	
● 人の気配を感じる、ホッとさせる景観の住宅地にしていきたい。	
武蔵野らしさを大切にしたいまちづくり	
● 住宅と道路の境界、商業地と住宅地の境界など、境界部分のつくりを大切にしたい。	
● 現在の街区の大まかさを変えずに、細しみのある景観を創出する。	
● 「壁」にならずに、建物の大きさや配置を工夫する。	
● 人や風や視線が通る。すき間や抜けの空間を積極的につくる。	
● 数木とパランソの取れた緑地の高さを工夫する。	
● 人が自然と集まる。街の緑地空間をそこここにつくる。	
● 伝統的な店舗を入れて、店の中の雰囲気が街に伝わるようなデザインにする。	

表1 武蔵野らしさを大切にしたいまちづくりの考え方



写真1 ル・ランシーのノートルダム教会



写真2 旧赤星鉄馬邸

な住宅地というものは、住まい手の日常的な目に見えない住まいに対する想いの結果なのです。

武蔵野らしさを大切にしたいまちづくり

JR中央線・総武線の三鷹駅北口につながる武蔵野市西久保1丁目の住宅地もそういう良好な住宅地の1つといえます。適度な広さを保った区画割、街路に心地よく顔を出す緑の配置など、住まう側だけではなく、街路を通る人たちにとっても、心地よい環境が保たれています、今のところ……(写真3)。

そのような良好な住宅地でも、少子高齢化の影響が少なからず散見する事態が目につくようになってきました。直接のきっかけは三鷹駅北口地区に計画された超高層集合住宅計画への異議申し立てでしたが、そのことが普段生活している地域の価値をあらためて見直し、これからについて意見を交換する場を生み、住民の側からのこの地区の将来像についての議論が始まりました。

2008年9月に施行された武蔵野市のまちづくり条例では、住み続けられるまちづくりに関するいろいろな住民参加の手法が制定されています。その中の1つに、特定の地区においてその地区の特性を生かした街づくりを推進するため、自主的なルール「地区まちづくり計画」を提案できる「地区まちづくり協議会」の設立という制度があり、そこに至るステップとしてまずは「地区まちづくり準備会」の設立から始めることになりました。

選んだ地区は、住民が住み続けられる地区と、そこに住んでいる住民が日常的に利用・活用している三鷹駅北口エリアの駅前広場や商業地も含む広範なエリアとして、喫緊の課題のみならず、次世代にまでつなげる地域の力を考え、提案することとしました。

第1段階として、参加するメンバーが共有できるまち

づくりに関する基本的な考え方を抽出し、個々の課題に対応するためのベースとしてもこの地区固有の力を確認し、今後個々の課題に対処する時に立ち戻るべきポイントとしました。この「地区まちづくり準備会」としての活動の成果としてまとめたのが「大切にしたいまちづくりの考え方」(図1、表1)です。「武蔵野らしさ」という言葉で表される曖昧な状態ですが、住んでいる人にとっては共有できる状況をあらためてまとめたもので、地区固有の力が表現されています。

住民が作り上げた地区のルール

できることからやってみようということで、「西久保一丁目緑をまもる地区まちづくり計画」の具体化を目指して、準備会の一部を切り離して「地区まちづくり協議会」への移行のための準備に入り、約1年かけて2014年11月に武蔵野市長の認定を受けて「西久保一丁目緑をまもるまちづくり協議会」が発足。具体的な活動のための「西久保一丁目緑をまもる地区まちづくり計画(案)」(表2)を作成し、認定申請のための作業、市との調整に入り、2016年7月12日に申請、同年10月20日に武蔵野市の「地区まちづくり計画」の第1号として認定されました。

その間、区域内の同意書を取る相手のリストの作成、登記事項証明書のうち必要な情報のリストアップ、計画案の説明会の開催、地域内の土地所有者・地上権者を戸別訪問して計画を説明した上で同意書への署名など、全ての作業を住民自らすることになり、知りたくもない他の住民のプライバシーにまで関わることになるなど、申請する住民側の負担が大きい制度であることがわかりました。地区まちづくり計画は、活用すべき制度ではありますが、申請に至るまでのハードルを少しでも下げないと宝の持ち腐れになってしまいそうです。

Table 2: 西久保一丁目緑をまもるまちづくり計画. A detailed table with multiple rows and columns containing text and diagrams related to the neighborhood plan.

表2 西久保一丁目緑をまもるまちづくり計画



表3 配布しているお願いのチラシ



写真4 手作りの銘木板

交流委員会 Bグループ

2019年度活動報告

交流委員会 法人協力 Bグループ

那須 浩
グループ長向 利也
副代表幹事
株式会社
エフワンエヌ

私たち交流委員会Bグループは、防水、塗料、左官材等を扱う施工業者、メーカー、商社で構成されており、2019年度においても、河野委員長のもと正会員と協力会員との交流とJIAの活動の活性化を目指し活動してまいりました。一方、2019年度は、自然災害や緊急事態宣言の発令などがありました。台風や豪雨により被害を受けられた方々、感染症により罹患された方々に心よりお見舞い申し上げます。また、医療に携わる皆様や感染防止のため社会に貢献されている皆様へ深く感謝申し上げます。

熱海サロンセミナー開催

昨年(2019.7.19~20)は、例年開催していた軽井沢から熱海へ場所を移し、お茶の水女子大学名誉教授の田中辰明先生をお招きして、「外断熱工法の現状と将来」について講演いただきました。また、株式会社クオリティの保坂真美子先生には「収納について」と題し、収納のコツを講演いただきました。翌日は、川奈ホテルゴルフクラブにて懇親ゴルフコンペを開催。17名にご参加いただき、有意義な講演と海沿いの名門コースでのゴルフと、充実したサロンセミナーになりました。



田中辰明先生(前列右から3番目)と藤沼前支部長、河野前交流委員長とBグループの皆様

青森 JIA 協力会サミット参加

青森県弘前市で開催された「JIA建築家大会2019青森 in HIROSAKI」(2019.10.17~19)にて参加した法人協力会サミットでは、各支部における地域活動や正会員と法人協力会員との交流活動が報告され、地域によっては会員減少や交流減少などの問題を抱えながらも、JIAを盛り上げようとする意欲的な意見が交わされました。翌日は、岩手山のふもとで開催された全国オープンゴルフコンペにて、皆さんと親睦を深めることができました。

建物見学会&忘年会

毎年恒例の建物見学会は、港区立郷土歴史館を見学しました(2019.11.22)。建築家 内田祥三よしかずによる重厚なデザインは外観同様、中央エントランスから見応えがありました。もともとは公衆衛生院であった歴史的建造物を耐震化のために改修し、2018年に郷土資料館、在宅緩和ケア支援センター、子育て関連施設などの公共の複合施設として生まれ変わったものです。

常設展示は「海と人のダイナミズム」「都市と文化のひろがり」「ひとの移動と暮らし」の3テーマに分け、港区の歴史がわかりやすく展示してありました。特別展では日唄修好150周年記念として、日本とオーストリアの国交が開始した明治初期の写真が展示され、今からは想像できない街並みを見ることができました。見学会終了後はスペイン料理を囲んで忘年会を開催し、1年の労をねぎらいました。

化研マテリアル、正岡智子様の感謝の会

Bグループの活動において、長きにわたり建築工学系の大学教授と正会員ならびに協力会員の方々とを「つなぐ」企画をして下さった化研マテリアル株式会社の正岡智子さんがJIAの協力会員を退任されることになり、ささやかではありますが感謝の会を行いました。化研マテリアル様にご協力いただいた夏の「軽井沢サロン」を思い出し、保養所でのバーベキューや夜遅くまでの歓談、そして高原ならではの爽やかなゴルフを思い出し、みな涙腺が緩みました。長い間ありがとうございました。



正岡智子様(左から3番目)とBグループの皆様(iPad、iPhoneでのWeb参加者含む)

事務局や交流委員会の皆様をはじめ、日頃よりJIAを支えてくださる多くの皆様に改めて感謝申し上げます。今後ともご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

交流委員会 Dグループ

新たなコミュニケーションツールの活用



交流委員会
法人協力Dグループ
リリカラ株式会社
青山 央

新たな取り組み

新型コロナウイルスが世界的に蔓延している状況の中で、企業も従業員の安全確保のために「在宅勤務」を命じる動きが出てきて、図らずもこの新型コロナウイルスをきっかけに、テレワークを導入する動きが加速しました。セミナーや各種イベントが中止となり、訪問活動や対面での会議が制限される中で、代替手段として、Web会議やウェビナー（オンラインセミナー）に取り組む企業が増えました。

当社リリカラでは5月に壁紙新商品の発売を予定し、JIA正会員メンバーの方へ商品紹介やイベント案内を行う予定でしたが、従来の活動が叶わず、代替案としてウェビナー開催を検討しました。

ウェビナーには多くのメリットがあり、

- ①移動なしでどこでも参加が可能
- ②大人数での参加が可能
- ③録画保存、繰り返し開催が可能
- ④PC、タブレット、スマートフォンで視聴可能
- ⑤参加方法が簡単
- ⑥Q&Aやチャットツール使用で、その場で質問が可能が挙げられます。

今回リリカラとして初めてのウェビナー配信をするにあたり、開催前の企画・準備として、①目的・ターゲット・コンテンツの確認、②配信方法・ツールの選定、③スライド資料の作成、講師の選定、④機材の用意が挙げられます。

新見本帳の紹介を目的としていたため、ターゲットが絞られ、収録商品を中心に内容を決定いたしました。配

信方法は、視聴者とコミュニケーションをとるためライブ配信を採用、セミナー後にQ&Aツールを使用して視聴者からの質問にお答えしました。配信ツールとしてZoomを使用しましたが、開催規模に応じてプランを申し込みます。集客方法としてはメールマガジンにて告知を行い、ウェビナーの内容や参加方法を案内しました。

コンテンツとしては3つのテーマで配信しました。施工事例の紹介では、物件オリジナルの装飾表現やインクジェットを使用したカスタム提案を事例を交えて紹介しました。オリジナルブランド「kioi/紀尾井」と伊勢型紙の紹介では、江戸から昭和初期にかけての貴重な伊勢型紙コレクションの意匠をもとに、モダンインテリアとして現代への提案を紹介しました。世界ブランドMorris & Co.の歴史紹介では、ブランドの歴史と共に、希少な製法で表現されたインポートコレクションの魅力をお伝えしました。

JIA正会員様にもご視聴いただき、セミナー終了後にはQ&A機能を使い、その場で質問に回答しました。

今後の活動

Web会議やウェビナーを通して、地域に関係なく会員同士の交流が図れます。ツール活用により、正会員の皆様と法人協力会員との双方向のコミュニケーションが可能となり、要望にそった内容にて会議の開催や会員限定のセミナー開催も検討できます。

まだまだ予断は許せない状況は続きますが、今後もJIA正会員の皆様と交流し、法人協力会員の新しい取り組みをご提案していきたいと考えています。



ウェビナー配信機材



kioi 変わり立涌に菊松葉



Morris & Co. Strawberry Thief

わたしの愛用ツール

建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたい便利なツールなどを紹介します。今回は、車とカメラを紹介していただきました。



MINI CROSSOVER COOPER S

大山早嗣



移動休憩中の車内

愛用ツールとしては、手元に手帳、ノート、筆記道具、PCなど自分の中で定番があるが、ここでは建設現場とオフィスを往復する時に使っている、ツールとしては少し大きめの「車」を紹介したい。MINI CROSSOVER COOPER S(初期型)の前は、MINI COOPER Sを愛用していた。社会人になって最初に乗りたいと思っていた車がMINI(今で言うクラシックMINI)でもあり、機能に直結した合理的なデザイン、40年以上も長く愛されるデザインに惹かれていた。

公共交通で移動できる都市部の現場を除き、現場とオフィスを往復する際は車を利用している方がほとんどではないだろうか。複数の現場を抱えている時は、オフィスで進めるプロジェクトを含め、常に同時並行で物事を進めなければならない。現場に向かう車での移動時間は、そんな頭の中を整理する上でちょうど良い。スタッフと一緒にいる時は、手は使えないが言葉でのスケッチや日程の調整、懸案事項の確認や疑問点の解決などを行う。

車種は関係ないのでは？との声が聞こえそうだが、高速走行でのパワーや安定性、小回りが利くこと、室内空間の広さ、そしてMINIという車自体のデザインが移動空間としての環境を補完してくれる。
(大山都市建築設計)

愛機カメラ

立石博巳



右から、SONYのフィルムカメラ(35ミリ)、SONYのデジタルカメラ、デジタルカメラ(フルサイズ)

私が写真と出会ったのは1946(昭和21)年、中学2年生の時でした。隣家のお兄さん(当時25歳くらい)と、荻窪のカメラ屋で、パーレット型のドイツ製レンズ(ラジオナー)の国産カメラを買いました。戦争中カメラは禁断で、セミ版の白黒写真は私にとって宝物でした。

時を経て、流行の二眼レフ「リコーフレックス」や「キヤノネット」「コニカ」等、数々の名機に出会いました。昭和42年、新宿さくらやで父と2人で買った「ミノルタSRT101」は、世界唯一の開放測光方式の一眼レフカメラで、2度目の感激の瞬間でした。その後αシリーズを10数台買い求めましたが、人材、技術はソニーに移り、Sonyミラーレスαシリーズは4代目まで開発され、2020年度カメラグランプリをはじめ3賞を受賞しました。

私は1987年新日本建築家協会が丹下健三初代会長により設立され、お誘いをお受けして、高島屋、立石は賛助会員(現在法人会員)として33年、12代の会長様にお仕えて、JIAやUIAなどのイベントや公式大会をフィルム、デジタルで記録させていただき、その数は数万枚となります。全日本写真連盟、美術団体・南画院写真部のメンバーにもなっています。今後も生ある限り記録写真を撮り続けたいと思っています。
(ワイス・ワイス)

JIA 建築系学生支援事業に協力しました！

NPO法人建築家教育推進機構は、新型コロナウイルスの感染拡大により経済的影響を被る建築を学ぶ学生の支援を目的とした公益社団法人日本建築家協会(JIA)の助成プログラム「JIA 建築系学生支援事業」の実施に協力しました。

6月1日から同15日までの募集期間中、全国から293名の建築系学生の応募申し込みがあり、審査の結果、56名の学生が助成対象者として選ばれました。助成対象者には、JIA会員有志の寄付による学生支援金を原資に、助成金が支給されました。

今回の支援事業にあたり、NPO法人建築家教育推進機構では「選定特別委員会」を設置して、学業・研究内容に対する評価に加え、経済的支援の必要性を重視して選定を行いました。

●「JIA 建築系学生支援事業」の概略

支援目的 : 建築系の大学生・大学院生の学業や研究(論文作成等)に対する助成

助成内容 : 助成対象者に対して、助成金10万円(1人あたり)を支給

応募資格 : 国内の建築系大学に所属する大学生および大学院生。専門分野が建築系(意匠・構造・設備等)であること

審査体制 : 「選定特別委員会」をNPO法人建築家教育推進機構に設置

募集期間 : 2020年6月1日～6月15日

応募申込者 : 293名。うち大学生(学部)131名、大学院生(修士・博士課程)162名

助成対象者 : 56名。うち大学生(学部)27名、大学院生(修士・博士課程)29名

●「選定特別委員会」の委員

委員長 和田 章

委員 飯田善彦、今村創平、上浪 寛、清水裕子、福島加津也

■「JIA 建築系学生支援事業」の詳細は以下を参照ください。

<http://www.jia.or.jp/resources/news/001/198/0001198/gLaxktf7.pdf>

秋の行楽

■秋の京都に憧れます。紅葉を見上げながら古寺を巡りたいという妄想が止まりません！(関本)

■今年はコロナ禍もあるが、新しく迎え入れた子猫たちと中庭のもみじを楽しみます。(中澤)

■食欲の秋、ラジオでは花咲ガニが旬を迎えていると言っていた。コロナ禍で東京からの移動自粛、行けないのでお取り寄せ。(望月)

編集後記

■例年のように家族で信州の田んぼでの稲刈り・脱穀収穫祭に参加できることを祈っています。(会田)

■今年の秋の行楽は……中庭のヤマモミジを観ながら、食欲を抑えつつ、密を避けて運動します。(吉田)

■東京都のシンボルマークといえばイチョウの葉。都内の数あるイチョウ並木の名所に銀杏を求めて放浪します。(市村)

編集 : 公益社団法人日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文

副委員長 : 中澤克秀

委員 : 会田友朗・吉田 満・望月厚司・関本竜太

編集長 : 会田友朗

副編集長 : 関本竜太

編集ワーキングメンバー : 広報委員+長澤 徹・中山 薫・有泉絵美・八田雅章・立石博巳

編集・制作 : 南風舎

Bulletin 285 2020 秋号

発行日: 令和2年9月15日

発行人: 大西摩弥

発行所: 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

印刷: 株式会社 協進印刷

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社)日本建築家協会(JIA) <http://www.jia.or.jp/>

・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

NPO 法人建築家教育推進機構で…

ご存知でしょうか。JIAが日建学院と共同で設立したNPO法人建築家教育推進機構(以下、NPO)は、登録講習機関として一級建築士定期講習を共催しています。この定期講習をJIA会員並びに会員事務所所員(非会員)の方に受講していただくと、NPOからJIA活動に対して助成することができますようになります。

なお、新型コロナ感染拡大により3月から定期講習を中止していましたが、7月より三密回避の感染症対策を十分に配慮したうえで再開しています。

JIA(建築家会館本館)会場で…

NPOの一級建築士定期講習ですが、昨年10月よりJIA(建築家会館本館)が講習会場のひとつに加わっています。新しい会場での開催についての認知度がまだ低く昨年の受講者も少数でした。

この時期、三密を避ける意味でも効果的で貴重な会場となっています。ご都合がつく方は是非ご参加ください。

開催日	Web締切	郵送締切
2020年10月8日(木)	9月25日(金)	9月24日(木)
2021年1月21日(木)	1月8日(金)	1月6日(水)
2021年2月18日(木)	2月4日(木)	2月3日(水)
2021年3月18日(木)	3月5日(金)	3月4日(木)

場所：建築家会館本館

上記日程以外でも…

NPOの一級建築士定期講習は、上記の建築家会館開催以外に、2020年10月から2021年3月までに月2回の合計12回、関東甲信越支部エリアである1都9県において多くの会場で開催(合計で259講習)されますので、こちらにも是非ご参加ください。

この日程・会場、及び申し込み等についてはJIAのHPの一級建築士定期講習案内をご確認ください。

また、JIA MAGAZINE 10月号に定期講習案内パンフレットを同封していますので、ご参照ください。

定期講習の
お申し込みは
こちらから→



JIA監修の
一級建築士定期講習に是非ご参加ください!

主催

NPO法人建築家教育推進機構、株式会社日建学院

NPO建築家教育推進機構の助成に是非ご応募ください!

下記成果物提出の主催者に記載の助成金額の提供を行っています。

- (A) セミナー・講演会・見学会・イベントの記録DVDの提出：助成金額6万円
- (B) セミナー・講演会・見学会・イベントの概要報告書(A4 1枚程度)の提出：助成金額2万円
- (C) 出版物の提出：助成金額5万円



通年応募受付中です!

← 助成金の申込書はこちらから

「建築家教育推進助成金 申請書」に必要事項を記入し、メールに添付しNPO建築家推進機構に送信ください。

《宛先》kkskikou@gmail.com